

天香學園狂騷曲



天香學園狂騷曲

《宝探し屋》子育て奮闘記

紫 桐子

この物語は九龍妖魔學園紀のパロディ小説です。
発売元とは一切関係ありません。





【葉佩 九龍】

《ロゼッタ協会》から派遣された、《宝探し屋》。その実態は《秘宝》を飲んで若返ってしまった《協会》のトップハンターの1人。実年齢は30代前半くらい。そんな年齢なので、内縁の妻がいたり、息子が2人いたり。基本的には子煩悩で、優しい。皆守や八千穂の面倒もよく見ている。



【アンリ】

葉佩九龍の実子。12月で10歳になる。預けられていた孤児院が戦火に巻き込まれ、弟の彩と日本にやってきた。家族が大好きで、ママが作ってくれたコアラのぬいぐるみが大好き。皆守らバディも大好き。ママ譲りの黒髪に青い瞳。日本のロボットアニメにハマったようだ。



【彩】

葉佩九龍の養子。7月で8歳になった。アンリと孤児院から焼け出され、葉佩を頼って日本へやってきた。アンリとは違い、日本語が若干不自由。人見知り。ママが作った羊のぬいぐるみを抱え、家族の愛情の中で育っている。ゲームに興味津々。



【菱木 亮太】

《ロゼッタ協会》諜報部所属の職員。26歳。若いが秀才であり、諜報部長代理として日々働いている。葉佩の内縁の妻の弟だが、葉佩に対して恐ろしく強圧的な態度を取る。なぜか一人称が俺様であり、慇懃無礼な態度。子供たちを心から心配している。

ここまでのあらすじ！

俺は葉佩九龍。《宝探し屋》です。

4月に私立天香學園高等学校に編入しました。

本当の年は30歳過ぎてるんだけど、以前の探索のときにひよんなことから若返りの《秘宝》を飲み干しちゃって、外見年齢は若返ったんだ。だから高校生として天香で潜入調査をすることになっちゃった。《宝探し屋》にも若いコはいるんだから、そのコらにやらせればいいのにねエ。何で俺なんだか。

おっと、話がズレちゃった。

俺はちょっとした特異体質で、遺跡に眠る《秘宝》の音が聞こえるんだ。実は、早くから潜入してた割に9月も半ばになるまで極普通に高校生活を満喫してたのはそのせいでねエ、『機を伺っていた』と言えば、もう少し聞こえもいいのかもかもしれないねエ。

さて、その転換期に俺の息子が日本に帰ってきた。ある種の運命だったのかもしれない。《秘宝》のお導きは何にもまして唐突だ。いつもそう。

俺にはアンリと彩っていう2人の男の子供がいてねエ、アンリは9歳、彩は8歳。上のコは彼女と俺の実子で、下のコは同期の《宝探し屋》の息子だったけれど、《協会》の要請で里子として引き受けた。

2人は海外にいたんだ。でも、孤児院（ホーム）のある国で内戦が勃発。2人は焼け出されて日本へやってきた。可哀想にねエ……

帰ってきた子供たちと俺は、《協会》から与えられた新しい家と、寝床である學園の寮を行き来しながら墓を攻略しなきゃならなくなった。

そこで大事なのが協力者だ。どんな遺跡を攻略するにしても、協力者は絶対的に必要になる。天香學園という果てもない闇の中で皆守甲太郎と八千穂明日香という大事な2人の《バディ》を見つけていた俺は、そりゃあもう遠慮なく、恥も外聞も捨てて2人に頼ることにした。そうしないと、自分も息子たちも路頭に迷っちゃうもの。

2人の小さな《宝探し屋》、2人の《ハディ》を連れた俺は、遺跡に呼ばれるまま探索を開始。取手鎌治、椎名リカの2人を《生徒会》から救った。

何とかここまでは順調だけれど、ここから先はどうなることやら。

六時限目終了後、教室。

「甲太郎ちゃん」

「何だよ」

その返事は常に喧嘩腰である。

「怒ってる？」

「怒ってない」

いつも通り、ゆらゆらとアロマを燻らせながら皆守は答える。

「……ん～、ならいいんだけど」

「何か用か」

「うん」

手元のクロスワードパズルの雑誌をバサバサと床に向けて振りながら――恐らく、間に挟まった消しゴムのカスを落としているのだろう葉佩はニコニコ笑っている。

「今日の『トワイライトファイル』の特番、見る？」

「……見ない」

「あれ？ ああいうの嫌い？」

「くだらない」

「そうかァ。……俺は結構好きなんだけどなァ」

「子供に悪影響がありそうだな」

「そうかなァ。……ほら、こういう商売してるでしょ？ 不思議な物って結構あるし、まんざら嘘とも言えないことをやってるときもあるし。悪影響はないと……」

「宇宙人なんてこの世にはいないんだよッ」

「……」

葉佩は二、三度瞬きして不思議そうに皆守を見た。

「特番の内容、知ってるんだねエ？」

「うるさい。CMで流れてたんだ」

「そうだねエ。そういえば、たくさん流してるもんねエ」

「九ちゃん、皆守くん、ヒナ先生来たよ～」

「はいはい」

「……ッたく……本当にくだらない……」

ホームルームの後、葉佩は保健室にアンリと彩を迎えに行った。

「あ、パパ～！」

飛びつかん勢いでアンリが葉佩に駆け寄る。その手には、プリクラ帳を持っていた。

「見て見て～！」

よくよく見ると、黒塚のプリクラが貼ってある。

「おや、至人ちゃんからもらってきたのかい？」

「うんッ！ 僕がお昼寝してる間に、彩が至人兄ちゃんのところに石持ってって、そのときにプリクラもらったんだって！ 僕たちのプリクラも至人兄ちゃんにあげたって！ ね、彩ッ」

「……うん」

彩は頷く。

「そうかい。よかったねエ。じゃ、帰ろうか。後でお話をたくさん聞かせておくれ。昇降口で明日香ちゃんと甲太郎ちゃん、待ってるからね。……今日は寮に泊まろうね」

「うんッ！ みんなでテレビ見るんだね?!」

「そ。鎌治ちゃんと甲太郎ちゃんと、至人ちゃんは……たぶん来ないだろうから、五人でテレビ見ようねエ」

てくてくと近付いてきた彩と、自分に抱きついていたアンリの頭を撫で、葉佩は黙ってこちらを観察していた瑞麗に頭を下げた。

「ルイちゃん、今日はいろいろとご迷惑をおかけしました。明日もよろしく」

「ま、私は大した迷惑はかけられていないが、心配はしたな。……まア、子供のすることだ。元気な方がいいだろう」

「ありがとね」

「いや、いいさ。……ところで、腕に原因不明の刺し傷を負った生徒が駆け込んできたのだが……本人はどこでその刺し傷を作ったのか覚えていないらしい。気が付いたら地面とチークダンスを踊っていたという」

「……覚えていない……？」

葉佩の頬から一瞬微笑が消える。

「そう言ってたんだ？」

「ああ」

「……うん。わかった……じゃ、ルイちゃん、また明日」

いつも通りの微笑みに戻った葉佩は瑞麗に手を振る。アンリと彩も、手を振った。

「バイバ～イ！」

「……さようなら」

「ああ、気を付けて帰れよ」

充電が終わったらしい《猫スーツ》は再び光学迷彩が発動している。昇降口で待っていた八千穂は一人で戻った来たらしき葉佩の後ろに小さな影が伸びているのに気が付いた。

「あ、見えなくても一緒だね」

「……影だけあるってのも、また妙なもんだな」

呟いた皆守はアロマに火を点けてぷかり、と煙を漂わせる。

「お待たせしました。さ、帰ろうッ」

「うんッ。……今日は九ちゃんのお部屋にみんないるんだよね～。いいな～、あたしも混ざりたい～」

「ダメだよ、明日香ちゃん。年頃の女の子が男だらけのむさくるしい場所に来たら。狼の群れの中に子羊を放すようなものです」

「.....嫌な表現するな」

皆守は歩き出した葉佩を斜に睨んだ。

「八千穂に誰が手を出すもんか」

「ヒ、ヒドッ！」

「.....ん〜、んふふッ。明日香ちゃん可愛いもん、わかんないよ？」

「一番危ないのが葉佩だったら笑えるがなア」

「え、九ちゃん?！」

八千穂の目が葉佩に向く。

「俺は、彼女がいるからね。絶対にありえない」

八千穂は「そうだよね〜」とどこか寂しそうに、葉佩の後ろから付いてくる猫型の影の尻尾がぴるぴると動いているのを見ながら溜息を吐いた。

「まア、いつかイイヒトが出来るからね、明日香ちゃんにも」

「だといいなア.....」

「ないだろ。殺人スマッシュ打つような女に」

「み〜な〜か〜み〜ク〜ン〜?！」

突然八千穂に掴まれた二の腕がミシッと嫌な音を立てたような気がして、皆守は「イテッ！」と咄嗟に悲鳴を上げる。

「折れる！」

「やってみる？」

「やめろ、阿呆ッ！」

「おやおや、お止めよ〜？」

「甲太郎兄ちゃんと明日香姉ちゃん、仲良しさんだね〜」

「.....だね.....」

子供の喧騒が聞こえたのか聞こえないのか、皆守と八千穂は睨み合ったまま夕暮れに沈む天香學園を歩いていく。

「離せッ！ バカ力女！」

「折ってやる〜ッ！」

「お止めって言うてるでしょ。.....あ、ああ、明日香ちゃん、本当に折れちゃうよ〜.....ッ！」

不愉快そうな皆守甲太郎を横目で見つつ、葉佩は夕食を食べていた。

「どうしたの？」

「別に」

「鎌治兄ちゃん、甲太郎兄ちゃん怖い〜.....」

「本当にね、どうしたんだろうね.....」

アンリはカレーのスプーンを咥えたままオロオロと皆守を上目遣いに見ている。彩は彩で、皆守の機嫌などお構いなしに、付け合せのサラダに甘めのドレッシングをかけてムシャムシャ食べていた。

「あ、彩、こぼしてるこぼしてる！」

気付いた葉佩は布巾を彩に手渡す。それを手に取ったのは皆守。

「仕方ねエなァ……」

機嫌が悪くても、世話を焼かずにはいられない世話焼き魔人・皆守甲太郎。

「う、う～……」

「口に物を詰め込みすぎだ。彩、お前は どうして たまに そういう ことを するんだ？」

「う～……ううー」

「彩ね、ハーブ類が大好きだから……今日のサラダ、美味しいんだと思うんだよねエ」

ベビーリーフと一把百円で安売りしていたロケット、マスタードリーフ、バジル等のハーブ類が混ざったサラダが、彩の口に合ったらしい。

「う～……う～……」

「彩、落ち着け。まだサラダはある」

「……うん」

頷くと同時に飲み込んだ彩は、自分の口の周りを拭ってくれた皆守を見上げている。

「ありがとう……お兄ちゃん」

「いや、いい。……少しは落ち着いて食え」

「うん……」

と、頷いた彩だったが、やはり口にハーブを詰め込んでいる。取手は彩の様子に苦笑しつつ、皆守を見た。

「でも、皆守君。どうしてそんなに眉間に皺を寄せてるんだい……？」

取手の問いに、皆守はハッキリした回答をしない。「まァ、そういう日もある」と言葉を濁す。

葉佩はというと、部屋の時計を見てウキウキとテレビのリモコンを手に取った。

「んふふ～。『トワイライトファイル』が始まるねエ」

ちょうど前番組のスタッフロールが流れている。アンリはテレビを見つめ、食事の手が止まっていた。これはいつものことだ。

「『飯の最中にテレビを見るな』っていつも言ってるだろ。アンリの飯が片付かないんだよ！」

「えエ～……」

「お前の息子を見てみる。……彩は彩で、止まってるだろ……」

彩は口の周りをドレッシングだらけにしながら、最近興味が出てきたテレビゲームのCMになるとピタッと食事の手を止めてテレビを凝視する。そのときの顔といったら、目をキラキラさせて「これほしいこれほしい」と訴えかけているようだ。

「彩君、アンリ君、ご飯食べてからじゃないと、皆守君にテレビ消されちゃうよ？」

取手の言葉に、アンリと彩はせっせと目の前のココナツカレーを食べ始める。それでも、時折手が止まりそうになるが、ハッと我に返って再び口を動かす。アンリは他のことに気を取られなければキッチンとよく噛んで普通に食べ終わるのだが、彩はとにかく食べるのが遅かった。一杯終えてから食べ始める父――葉佩も食べるのはそれほど早くない――と大体同じくらいに食べ終わる。彩の場合、晩

酌をする父のスピードに合わせているうちにこうなってしまった感があった。

「ご馳走様でした」

アンリはスプーンを置き、ジッとテレビ画面を食い入るように見つめる。

「ウチュージンだって！ ウチュージンて何？」

皆守の膝をポンポンとアンリは叩く。皆守は心底嫌そうな顔をして、

「……あァ？ そんなもんはこの世にいない」

アンリの頭をわしわしと乱暴に撫でつつ呟いた。

「えエ〜ッ!? いないの〜……？」

「アンリ、宇宙人っていうのはねエ」

葉佩の暢気な声。

「宇宙のどこかにいる、俺たち人間みたいな人たちのことだよ。どんな姿形かはわかんないけれど、もしかしたら、こうして話したり、一緒にご飯食べたり出来るんだよ〜」

日本酒のピンを傾けてグラスの中に注ぎつつ、睨む皆守に苦笑を返す。

「すごいねッ！ すごいすごいッ！」

「アンリ君は、宇宙人に会ってみたいの？」

「会ってみたい……！」

取手の問いにコクコクと頷きつつも、アンリはテレビに釘付けになっている。

「……ウチュージン……」

彩は抱えていたサラダボウルをようやく離し、布巾で口の周りを拭くと、「ご馳走様でした」と手を合わせて頭を下げた。そして、アンリのいるテレビが一番よく見える位置に移動し――そこにはアンリの隣に父がいるのだが、父を押しつけて陣取る。

「はいはい。パパは片付けをしますよ。お邪魔様」

苦笑した葉佩はグラスの酒を一気に呷り、空いた皿を持って席を立つ。

「鎌治ちゃん、甲太郎ちゃん、二人のこと、ちょっと見ててねエ」

「わかったよ。葉佩君」

「……はいはい」

炊事場で洗ってこようとトレイに皿を載せ、部屋を出ようとした葉佩を彩の声が呼び止めた。

「父……」

「ん？」

「ウチュージン、いる？」

「いると信じれば、いると思うねエ。……彩がいると信じていれば、いつか会えるよ」

彩は頷いて再びテレビに視線を戻す。

そんな親子の様子を見ながら、取手は何気なく皆守に尋ねた。

「皆守君、宇宙人嫌いなのかい？」

ボソッと呟いた言葉に、アンリと彩が反応する。ジッと自分を見上げてくる子供二人の頭を鷲掴みにして、テレビの方に向けさせた。

「ほら、アダムスキー型の古めかしいUFOが飛んでるぞ」

「うわ、ホントだ！」

「アダムスキー型……」

再び画面に釘付けの子供二人の背後でベッドに寄りかかると、葉佩が床に寝る予定で出してあった毛布を勝手に拝借して、ぐるりと包まる。

「あ～、あったけ～……」

「話、途中なんだけど……U F Oには、詳しいのにね」

「アダムスキー型とかは一般常識だろ」

「そうなんだ。ふ～ん……」

「言いたいことがありそうだな」

「別にないよ。ただ、『子供たちの言うことを頭から否定してしまうのはどうかなァ』と思っただけだよ」

「……」

「宇宙人とか、夢があると思うけれどね」

「そうか？ 俺にはわからない。……あ～、眠イ……」

アロマパイプを啜え直し、皆守は火を点ける。

「だって、葉佩君にしろ、アンリ君も彩君も、《宝探し屋》だよ。僕らからしてみれば、それこそ夢みたいなものを追いかけてるじゃないか。……そう考えると、宇宙人がいてもおかしくはないし、むしろ、宇宙人がいるのが普通みたいな気がしてくるよね」

「さァな」

皆守は空き缶を手元に引き寄せると、アロマの灰を落とす。

「俺は知らん」

パタパタと廊下を歩く音がして、ドアが開いた。

「ただいま。洗ってきたよ～。余ったカレーは、クラスのコにお裾分けしてきました」

葉佩はニコニコ笑いながら部屋の中を見回して、皆守に視線を留めた。

「甲太郎ちゃん」

「何だよ？」

「毛布がラベンダー臭くなるでしょ」

「臭くない。……いい香りだろ？ 言い方間違えるなよ」

「今は平安時代じゃないんだから。香を焚き染める必要はありません」

「遠慮すんな」

葉佩の「いや、遠慮はしてないんだけどね……」という小さなツッコミを華麗に無視した皆守はテレビを指差す。

「……ほら、次のコーナーに移ったぞ。……異星人に誘拐(アブダクト)される、か……」

「あぶだくとって何？」

「異星人に連れ去られちゃうんだって」

取手が答えると、アンリは不安げに取手を見上げ、その後で父を見た。

「ヤだ～……誘拐されちゃうの……？」

「知らない場所……連れて行かれる……？」

「悪いコは連れてかれちゃうんだよ～。んふふッ」

笑う父に、アンリと彩はお互いの手をギュッと握り合い、ブルブル震えている。

「だから、普段からイイコにしていらないとね？ 廃屋街に足を踏み入れたり、パパやバディのみんなに心配をかけたらしなければ、誘拐されたりしないから。んふふふふ……」

「イイコになるッ！」

「父、助けて……」

「はいはい。よしよし……」

そんな親子三人の様子を眺めていた皆守は溜息混じりに呟いた。

「……宇宙人はなまはげか何かか……？」

「あ～……あの子達にとっては、なまはげの方が怖いかもしれないけれどね」

苦笑する取手に、皆守は再度溜息を吐いてテレビをボ～ッと眺めていた。

十月六日。

「.....朝ご飯.....お腹空いた.....」

朝、六時半。彩は父を揺り起こす。

「父、お腹空いた.....」

「ん.....ん～.....」

アンリはすやすやと夢の中。葉佩は彩に呼ばれて目を開けた。

「あ、おはよ.....彩.....ど、したの.....？」

「お腹空いた.....」

「お腹空いたのかい.....？ え、と朝ご飯は、と.....あ！」

買ってない。いつもの癖であるものだと思い込んでいた。

「あ～.....と.....少し我慢出来る？」

頷く彩。葉佩は私服に身を包むと、彩に言った。

「ゲームして待っててね。すぐに、パパ戻ります」

「うん.....どこに行く？」

「近所のコンビニ。.....チーズケーキ、あったら買ってくるね」

「待ってる。.....彩、メロンパン」

「ん。わかった」

彩の頭を撫でた葉佩は珍しくドアから出た。子供の前で一度窓から飛び降りたが、その後で皆守にこっぴどく叱られたのを教訓にしている。

「.....ゲームする.....」

彩はテレビをつけ、本体を起動させた。

「.....んだよ.....朝っぱらから.....」

隣室からやたらとハイテンションな歌が聞こえてくる。葉佩の部屋は角部屋。隣には皆守。葉佩の部屋の騒音で迷惑を被るのは皆守一人である。

「うるせエ.....ッ！」

寝起きでいつも以上にぼさぼさの頭のまま、葉佩の部屋のドアノブを回した。開いている。

「.....」

まず見えたのは、テレビの前でゲームのコントローラを握り、BGMに合わせて鼻歌を歌っている彩。そして、大音量のゲームミュージックの中、平然と眠っているアンリ。葉佩の姿はない。

「.....彩」

聞こえていない。

「彩」

今一度呼ぶと、顔を皆守に向けた。

「.....あ、お兄ちゃん.....おはよう」

「うるさい。少しボリュームを下げろ」

「.....うん.....」

彩は素直にボリュームを下げる。皆守はそんな彩に訊いた。

「親父はどうした？」

「父、お買い物」

「.....この時間にか？」

「朝ご飯」

「.....そういや.....買ってなかった気がするな.....それでいないのか」

「うん。お留守番したら、チーズケーキ」

「ホントに好きだな、お前.....」

そうこうしている間に、部屋のドアが開いた。

「ただいま〜。.....おや甲太郎ちゃん、今日は早一一」

皆守は振り向くと、ギラリと葉佩を睨んで胸倉を掴む。

「イタッ！ イタイイタイッ！ どうしたの？ いきなり.....ッ」

「こちとら一日十時間は寝たいんだよッ！ それなのに、お前の息子のせいで叩き起こされたんだ！

」

「え、えエ〜.....彩は何もしてない一一」

「ゲームの音に起こされたんだよ！」

葉佩は前に立ちふさがる皆守の影から彩の方を覗き込む。言われてみれば、恐ろしくハイテンションな音楽が流れていた。これは目覚ましになる。

「この歌、彩は大好きで.....ひはひほ〜.....ほっぺひっぱははひへ〜」

皆守に頬を両方に引っ張られた葉佩は手に持っていたコンビニの袋を皆守に見せた。

「ほへ、はへ〜はんはっへひははは」

「何だよ、言いたいことはハッキリ言えよ」

ようやく皆守の手が頬から離れ、葉佩は両手で頬を撫でつつ言う。

「甲太郎ちゃんにも、カレーパン買ってきたから。マンゴーラッシーもあったから、それもつけたよ〜」

「.....チャラにしてやる」

「うんッ。ありがとね」

葉佩は部屋に上がると、ちょうどゲームを終了させた彩に向かってニッコリ微笑む。

「ただいま、彩」

「おかえりなさい.....」

葉佩はギュッと彩を抱きしめると、コンビニ袋の中から牛乳と菓子パン、チーズケーキを取り出した。

アンリは部屋の中に食べ物の匂いが漂い始めたのを感知したのか、チーズケーキに反応したのか、パチッと目を覚ましてベッドから起き上がるなり、テーブル上のクリームパンと、アンリ用と思し

きチョコレートムースに釘付けになった。

「いただきま〜す！」

「『おはよう』が先だ！」

朝一番から皆守のツッコミが炸裂し、六日は幕を開けた。

「ウチュージンとかイセージンとか、ルイ先生はいると思う？」

「.....似たような戯言をほざく奴になら心当たりはあるが.....」

「ウチュージンと友達なの?！」

「頭の中は異星人並みに理解し難いが、奴は間違いなく地球人だ」

「そうなんだ〜.....」

「異星人に会いたいのか？」

「うんッ！ 会ってみたい！」

「.....彩もか？」

「彩も.....」

「そうか。.....君たちが葉佩のような仕事に就くのなら、人類の《秘宝》に近付くのなら、そのうちに会えるかもしれんな」

「会いたいなァ.....」

「会える.....」

子供たちが瑞麗相手にそんな話をしている頃、教室でも年頃の男子生徒二人が、年頃らしい話をしていた。葉佩は苦笑して頬を搔き、皆守は呆れ果てた目で彼らを見つめている。

「.....情けなくなってくるな。なァにが金髪美女なんだか.....。宇宙人だの異星人だの、いたとしたって、みんな蛸みたいな姿に決まってるんだ」

「まァ、そう言いなさんなよ。彼らもね、そういう歳なんです」

「.....奴らと同年の俺はどうなるんだ.....」

「甲太郎ちゃんは、何だかちょっと違うよねエ.....興味ないの？ あるの？ ん〜.....わかんないねエ.....？」

首を傾げる葉佩に、皆守は溜息混じりに言う。

「俺は、お前に俺たちくらいの歳があったのかどうなのかを知りたいところだ」

心底傷ついたような顔をして、葉佩は「えエ.....ッ」と悲しそうな声を出した。

「酷い.....俺にだって若かりし頃があったのに.....。あれは、そう.....彼女のために――」

「そういや、八千穂がないな」

葉佩の話聞く気がない皆守は、容赦なく遮って話の腰を折り、葉佩に文句を言わせる隙も与えず教室を見回しながら言葉を続けた。

「あいつは俺に『遅刻をするな』『授業に出ろ』とか言うくせに、自分は遅刻かよ」

「甲太郎ちゃんとは頻度が違うでしょ」

手の甲で皆守にツッコミを入れる葉佩。そんな二人に声をかけた女子生徒。

「古人曰く……『人の姿は気味が悪くて好感が持てないが、慣れれば大丈夫だろう』」

「月魅ちゃん。おはよう～」

「七瀬ッ」

小さく「あア、また長い話が始まるぞ……」と呟いた皆守の声に、葉佩は小さく笑って七瀬の話に耳を傾けることにした。

子供たちは手を繋いで校舎の中を探索していた。

休み時間中は周りを見ても生徒生徒だが、授業時間中は数えるほどしか廊下に生徒はいない。その中の一人に二人は出会っていた。

「そんなものを着て……暑くはないの？」

艶やかな黒髪が踝まであるような女子生徒の目が二人を見つめている。

「……葉佩さんと同じ気配。……人の目からは見えない仕組みになっているのかしら……」

「……」

「……」

アンリと彩は自分たちを見つめる女子生徒を見上げる。

「私は白岐幽花。はじめまして……。これから……温室に来る……？」

子供たちは顔を見合わせた。

「あ、明日香姉ちゃん、走ってる！」

「……遅刻……」

「珍しいわね……八千穂さんがこんな時間に登校なんて……」

アンリと彩は、猫スーツを脱いで、白岐の手伝いをしていた。

「このお花、こっちでいいの？」

「ええ。そこに置いておいてね」

てきぱきと動くアンリに比べ、彩は見たことのない植物が繁栄しているのが物珍しいのか、興味深そうに観察していて仕事にならない。

「……綺麗……」

「温室は暖かいから……ブーゲンビリア、綺麗でしょう……？」

「……ほしい」

「葉佩さんに頼んで買ってもらうといいわ」

「うん。……ブーゲンビリア……覚えた……」

「でも、これからの季節、ブーゲンビリアは難しいかもしれないわ……」

「難しい……？」

「寒いのが苦手なのよ……」

彩は納得したのだろう頷いて、ようやく鉢を所定の位置に置き、その傍に植えられていた一メートルほどの高さのアカンサスを見つめる。

「大きい……」

「……葉佩さん以上に好奇心が強いよね……」

小さな微笑を浮かべて彩の様子を眺めていた白岐にアンリは言う。

「パパのこと、知ってるんだね～」

白岐は頷いた。

「同じクラスだもの」

「そうなんだッ！ 幽花姉ちゃんとパパ、同じクラスだったんだ！」

「ええ」

「パパ、カッコイイでしょ?!」

「……どうかしら……」

アンリの言葉に首を傾げる白岐。

「眠らない羊……決して眠ろうとはしない人……羊の群れの中でただ一人、たった一つのことだけを見つめる人」

「？」

「眠りを妨げる人……呪われた學園に来た人……」

「お姉ちゃん……？」

彩とアンリは白岐を見つめた。白岐は首を横に振ると腰を屈めてアンリと彩に視線を合わせる。

「……毎日、あなたたちは學園にいるの？」

「うんッ！ パパと一緒に来るの！ 保健室で遊んだり、学校の中探索したりする！」

「……そう……」

「毎日、楽しい！ パパと一緒にだし、ルイ先生も、甲太郎兄ちゃんも明日香姉ちゃんも、鎌治兄ちゃん、リカ姉ちゃん、至人兄ちゃんもいるから！」

「……」

「明日からは幽花姉ちゃんもいるもん」

白岐は困ったような微笑を浮かべて二人の子供を見つめた。

「……そういえば……」

「？」

「あなたたちの名前を、私は知らない……」

アンリは「そだね～」と頷き、ニッコリ笑った。

「僕、アンリ！」

彩は俯いて、上目遣いに白岐を見上げる。

「……彩」

ガラッ！

開いたのは、皆守の席の真横のドア。足を机の上に投げ出していた皆守と八千穂の視線が空中衝突したときにはもう遅かった。

「うわきゃアアアッ！」

「んなッ?!」

「あァーッ！ 明日香ちゃん！ 甲太郎ちゃん！」

ガタドガッ！

三人の声と皆守が椅子から驚異的な速さで退き、八千穂が一人皆守の椅子に蹴躓いて派手にすっ転んだ音が3 - Cの教室内に響き渡る。

「ちょ……ちょっと……明日香ちゃん……大丈夫……？」

手を差し出した葉佩に皆守は呆れ果てた調子でこう言った。

「阿呆か。机やら椅子がぶっ壊れたとしても、八千穂が怪我するはずないだろ」

「ひ……ヒッド〜ッ！」

差し出された葉佩の手を握り、「九ちゃん、優しいッ」とニコリ笑ってから八千穂は皆守に向き直った。

「ちょっと、皆守くん！ 酷いよ、その言い草ッ！」

「事実だろ」

葉佩は首を傾げ、八千穂の首筋辺りに顔を近付ける。

「……おい、オッサン、何してんだ」

「『オッサン』なんて酷い。まだ三十代ですよ……いやね、明日香ちゃんの首のこのところに、赤い何かがある……」

「あ、それね、虫刺されだと思うんだ〜。昨日までなかったもん」

八千穂が語る昨晚の出来事に、皆守の顔色が悪くなって保健室に逃げ込んだのはそれからすぐのことである。

「……ああ、葉佩か」

「こんにちは」

今日はベッドが随分埋まっている日らしい。あからさまに子供のことを訊くわけにもいかず、

「……『いる』？」

それだけ訊いた。

「ああ……腹を減らしたお前の友人なら『いる』」

「んふふッ。そっちにも用があるんだよ。ちょっと失礼します」

葉佩は皆守がいつもゴロゴロしているベッドに近付くと、

「カレーパン、持って来たよ〜。でも、ここではあげません」

「……何で？」

葉佩はH. A. N. Tを取り出して、ピッピッと何かをいじると、そこに現れたマーカールを見て「

うん」と頷いた。

「何だか、屋上にいるみたいだね。上行こうよ」

「.....わかったよ」

渋々起きた皆守を連れて瑞麗の方へと戻ると、葉佩はいつも置かせてもらっている子供と自分の屋のお弁当を持って屋上へと向かった。

「明日香ちゃんも呼ばなきゃ」

階段を上がりながら、メールを打ち、子供らがいると思しき屋上のドアを開けた。

突き抜けるような青空。秋晴れの空の下、風が心地よい。視界が一瞬白く焼きつくような感覚がたまらない。それすらも、快である。

「.....誰もいない？　かな？」

「いねェな」

「うん。.....彩、アンリ〜！　ご飯だよ〜！」

呼びかける。

どこからか、聞きなれた声が近付き、影がコンクリートに落ちている。

「パパ〜！」

「父.....」

尻尾が揺れ、手を振っているのか影が動く。

「お待たせしました〜！　お昼にしようね〜。.....ほら、甲太郎ちゃんも、パンばかりじゃなくて、俺のお弁当分けてあげるからバランスよく食べようね」

「.....俺まで子供扱いすんな」

膨れる皆守。バンッ！　と屋上のドアが開き、八千穂が顔を出した。

「取手クンと椎名サンゲットしてきた〜！　みんなでお昼食べよ〜！」

男子寮一一方。

「明日香姉ちゃん、誰かに見られてるの？」

「そうみたいだねェ。どうも異星人かもしれないんだよ。心配だねェ。女子寮を覗くなんて.....。誘拐なんてされたら.....」

「.....おい」

「そんなわけで、パパは明日香ちゃんに言われたとおり、夜に見回りをしなきゃならなくなっちゃって」

「.....彩も行く」

「僕も僕も〜！　ウチュージン！　イセージン！」

「おいッ」

イライラと頭を掻く皆守の声に、親子三人が顔を上げた。

早めの夕食を食べ終え、葉佩はペリエを飲みながら、彩とアンリはマミーズで買ったチーズケーキ

とチョコレートケーキを食べながら皆守を見る。

「お前ら、夜中に出歩くな。それに、女子寮を好き好んで覗く異星人がいるかつつ～の！」

「わからないよ～？」

葉佩の目が僅かに細くなる。

「異星人は常に我々人類を誘拐しようと監視しているんだからね……」

そう言って低く、喉の奥で笑う。皆守の頬がヒクリと引きつった。

「……お前な」

「だってェ」

普通の調子に声を戻した葉佩は、頬杖をついて皆守を見る。

「明日香ちゃんに逆らえると思う？ ……甲太郎ちゃんを見てると、絶対に逆らえないという気がするんだよね。いつだって言い負けてるし」

「お、お前、『超八千穂理論』に敵うと思ってんのか?!」

「勝てないから、こうしてご飯食べて、いつでも出撃出来るように準備を整えてるんだよ？ んふふ～」

H. A. N. Tが鳴った。

「明日香ちゃんからメールだ。『アイアイマム、葉佩九龍、ただいま作戦行動に移ります』と。これでオッケー」

「……はア……」

「溜息吐いてないで、行くよ、甲太郎ちゃん」

笑って、がっくりと肩を落としてテーブルに突っ伏す皆守の肩をポンポンと叩く。立ち上がった葉佩は、腕を組むと子供二人を見下ろして言った。

「彩上等兵、アンリ上等兵、これより作戦行動に移る」

「サー！ イエッサー！」

口の周りをクリームだらけにしたままの子供二人は立ち上がるなり葉佩に敬礼し、ティッシュで口の周りを拭ってから猫スーツを着込むと、各々のリュックを背負う。恐らく、パンパンに膨れているところを見ると、彼らの弾丸――お菓子とジュースが入っているに違いない。

「……元気だなア、おい……ここはいつから軍隊になったんだ……」

皆守は、もう一つだけ大きな溜息を追加した。

「寒い」

「だねェ」

「老体には堪えるだろ」

「老体じゃないもの。……葉佩九龍、十八歳で――」

ズガンッ！ ……ぼてん……

「蹴るぞ？」

「……蹴ってます……！」

上段蹴りを食らって二メートルほど吹っ飛んだ父の姿に、アンリは毎度のことながら涙目になって「パパ～！」と駆け寄るが、彩はすでに見慣れた光景にサラリとそれを流して女子寮を指差した。

「……いる……」

女子寮の隅をこそこそと移動する何かの影を視認したとほぼ同時に、皆守の携帯と葉佩のH. A. N. Tが鳴る。メールの中身を確認し、二人は揃って溜息を吐いた。

「……八千穂め」

「行ってみよっか」

「後々うるさいからなァ……。行くぞ、アンリ、彩」

「は～い！」

「……はい」

右側からぐるりと回る。

「……声がするねェ……」

女子寮の窓が少しだけ開いている。

立ち止まった葉佩は、そこから中を覗き込んだ。

「……お風呂場だ。女の子いっぱい。女子寮だものねェ、当たり前か」

「ぶ……ッ！」

アロマパイプを噴き出しそうになりつつ、皆守は葉佩の肩を掴んで自分の方に向けさせた。

「お前が覗いてどうするよ？ えェ？」

「だって、見えちゃったんだもん。いや、でも、うちの奥さんの方が全然綺麗だし、俺にはロリコンの気はないしー」

「問題はそこじゃない」

アンリと彩は、笑い出したいのをこらえるように、肉球付きの手で口元を押さえている。が、皆守と葉佩には見えていない。

そこに。

「……いよォ。カレーレンジャーと葉佩ではないか」

低く抑えた聞き慣れた声。現れたのは境玄道だった。

「こんばんは。境さん」

葉佩は口元に微笑を浮かべる。

「ここで何を？」

「お前らと同じじゃよ」

鼻の下を伸ばして笑っている。少々下品な笑い方だ。

「……一括りで俺までまとめんじゃねェよ……」

皆守のツッコミに、境は「静かにせんか！」と小声で言う。

「見つかるじゃろが！ ……煙草の火は消しとけよ？」

「これはアロマだ。クソエロジジイ」

「口の減らないガキじゃの～。まァ、いいわい。儂は別の覗きスポットに行く。……ではの」

足取り軽く去っていく境を見送り、皆守は溜息を吐いて葉佩の背を押した。

「先に進もうぜ。……とっとと終わらせようや」

「ハロ～」

脇道で後ろから声をかけられた葉佩と皆守は、胡乱としか言いようがない派手な服装の男を見つめていた。ピンク色のシャツが、やけにテカテカと闇に光って見える。

ついつい、と背後から、恐らくアンリと彩が制服の裾を引いている。目の前の怪しい男に恐怖を感じているのか、それとも――好奇心を持って向かっているのか。

「ハロ～」

葉佩は何とも暢気にそう返す。鴉室は面白いものを見るように片眉を跳ね上げて笑った。

「最近の高校生は随分とフレンドリィなんだな」

「こいつだけだ」

皆守のツッコミ。

「で、オッサン、こんなところで何してんだ？」

「オッサン?! 俺はまだ二十八歳だ！」

葉佩がその場にへなへなと膝から崩れ落ちる。

「……俺の方が、上かい……？」

「何だその反応は！」

葉佩の呟きは聞こえていない。そして、当然のことながら、葉佩の肩にぼすつと置かれた肉球付きの二本の手にも気付いていない。

「こいつのことは気にすんな。……それよりも、そんなことで威張るなよ。俺たちから見れば、充分オッサンなんだからな」

地団太を踏みそうな勢いで鴉室は眉間に皺を寄せ、フルフルと肩を震わせた。

「これだから、ガキの相手は嫌なんだよ……！」

大人気なく吐き捨てたが、気を取り直して顔を上げた。

「あ、自己紹介してなかったな。……俺は鴉室洋介。私立探偵だ。この学園のことをいろいろと調査してるわけ。オーケイ？」

「探偵なら、初めからそう言えよ」

呟いた皆守に「そういう問題じゃないと思うよ～？」と地獄の底から響いてきそうな声で葉佩は呟く。鴉室はそれが聞こえているのかいないのかわからないが、完全に無視した状態で皆守を見た。

「ときに。……君たちはこの学園の生徒かい？」

パンッとズボンの埃を払い、葉佩は立ち上がるといい笑顔で答える。

「若くて、健全な天香学園生です」

『若くて』の部分が無駄に強調しつつ、葉佩は微笑む。皆守は溜息を吐いて、腕を組んだ。

「訊きたいことがあるんだけどよ――」

切り出した鴉室を遮ったのは皆守。

「その前に、オッサン」

「オッサン言うな！」

「……ここは完全な全寮制で、外部から入ることは出来なくなっている。何で探偵がこんなところにいるのか説明してもらおうか？」

口調はおっとりしているが明らかに詰問している皆守に対して、鴉室はとうとうと探偵としての自分の使命について語り――その後半部分は根も葉もないものだったが、光学迷彩に身を包む子供たちは大興奮でギュウギュウと父と皆守の制服を引っ張って鴉室の話に耳を傾けている。

「……葉佩」

気持ちよく語っている鴉室を見ながら、皆守は隣に立つ三十代の高校生に訊いた。

「子供の手前、見ず知らずの人間を蹴ってもいいもんかと我慢してたが……蹴ってもいいか？」

「好きにおしよ。……アンリと彩は、すでに特撮ヒーローだと思い込んでいる可能性はあるけれどね……」

「じゃ、お言葉に甘えて。……フン……ッ！」

目にも留まらぬ速さで、皆守の上段蹴りが鴉室の延髄にクリーンヒットする。倒れ伏し、一瞬動かなかったが、次の瞬間には何事もなかったかのように立ち上がって皆守に食ってかかった。

「イッテ～なァッ！ 目上の人間に敬意を払え！」

「不法侵入者に払えるか！ 阿呆が！ ……このまま警察に突き出すぞ……？」

至極真面目な皆守の目に、鴉室は「はいはい」と立ち上がると、自分がこの学園にやってきた経緯を二人――と見えない二人に語って聞かせた。

「わけのわからんオッサンだった……」

「俺のが年上なんて……年上なんて……」

「いい加減現実を見ろよ。いかに自分が若作りかわかっただろうが」

「酷い……酷いよォ……若返っちゃっただけなのに……若作りじゃないし……」

鴉室が落とした《墓守小屋の鍵》をチャラチャラと弄びながら、皆守は「あ」とポケットの中を漁った。

「そういや、コーヒー買ってあったんだ。お前の分もあるぞ」

皆守はまずコーヒーを一本ポケットから取り出した。側にいる見えない二つの気配も、父たちが休憩するらしいと見て、ゴソゴソとリュックの中からガソリンを取り出しているらしい。二人とも、PETボトルのミルクティーだ。

コーヒーと聞いた葉佩の眉間に皺が寄った。

「飲めないよ？」

苦いものが嫌いな友人に対し、皆守はニヤリと笑う。

「知ってる。半年も付き合ってるやわかるっての。……お前には、ほらよ」

パシッと手渡されたものを見て、葉佩の眉間に違う意味の皺が寄った。

「……何これ」

「自販機で売ってた珍しいものを買ってみた」

缶には『黒胡麻ミルク』と書かれている。

「……これは……すごいね……字面からしてインパクトがあるよ」

「そうだろう。喜ぶと思ったぜ」

嫌がらせといえればいいのか、子供の悪戯といえればいいのか。とにかく、「してやったり！」という顔をしている皆守を見た葉佩は、眉を八の字にして溜息を吐く。

「……ありがとねエ～」

「どういたしまして」

プルタブに指を掛け、引こうとしたとき、ガサッ……と何かの音がした。葉佩は子供のいる方に手を伸ばし、二つの手が自分の手を握った感触を確認して、そのまま自分の後ろに回るように引っ張る。

「……何だ？」

「……さァねエ？」

続いて、奇妙な低い振動音が辺りを包んでいく。アンリと彩が自分にしがみつくのがわかった葉佩は、浮かべていた笑みを消した。

「何だ?! この音はッ！」

「……煙も出てきたみたいだよ～？」

「ゲホッ! ゲホッゲホッ！」

「コホッ! コンコンッ！」

「ゴホッ！」

小さな咳も聞こえた。葉佩は子供たちに言う。

「手を口と鼻に当てて、出来るだけ煙を吸い込まないように息をしなさい」

「う、うん……」

「……うん」

頷いた子供たちの形に煙が避けていく。子供の無事を確認した皆守だったが、不意に射した光に目を向けてそのまま固まった。

「葉佩、あれを……！」

「お、おオ～? 何かいるねエ？」

「ウチュージン……！」

「イセージン……」

宇宙人だか異星人らしきもののシルエットは、切れ切れ棒読みのセリフをこちらに語りかけてくる。体を乗り出しそうなアンリと彩を押し留めつつ、葉佩は驚愕に目を見開く皆守を見た。

「甲太郎ちゃん？」

いつも覇気のない皆守の目が爛々と輝いている。

「葉佩……この世に異星人は本当にいたんだ……七瀬の言ったことは、間違いじゃなかった……」

「……甲太郎ちゃん……？」

「俺たちは、歴史的瞬間に立ち会っているんだ！」

「こ……甲太郎ちゃん……」

葉佩の視線が生温かくなって、口元に半笑いが浮かんでいることにも気付かない皆守は、大興奮の

中で光の中に立つ影を見つめている。葉佩としては子供のようにしゃぐ皆守を見たのは初めてで、「アンリと彩と変わらないねエ……」と、こんなときばかりどこか大人の視線で微笑ましく皆守を眺めている。

『繰り返ス。ワレワレヲ探シテハナラナイ……ワレワレヲー』

バツンッ！

酷く機械的な音がした。響いていた低い音も消える。

「キャ〜ッ！ 停電ッ?!」

「そんなに電気使っていないと思うんだけど……」

「誰かブレーカー見てきてよ〜！」

蜂の巣をつついたような騒ぎの女子寮と壁一枚隔てた脇道の葉佩、皆守一行の温度差は凄まじい。

「……」

「……」

「……」

「……」

目が慣れてきた四人の前に現れたのは、やたらと顔の大きな男子生徒だった。男子生徒は言う。

「ワレワレヲー」

「……ッ！」

皆守の手が口を開けていない中身入りの缶コーヒーを思い切りぶん投げる。ゴッ！ という鈍い音と同時に、

「おぐォッ！」

と野太い悲鳴が聞こえた。

「……か、顔の大きな……人がいる……お面？ お面？」

「……お化粧……して……」

違う意味で怯えている子供を「よしよし」と宥めながら、葉佩は肩で息をしながら男子生徒を睨んでいる皆守の横顔を見る。

「か、顔に缶が……！」

「やかましいッ！ 驚かせやがってッ！ ー」

照れ隠しなのか、普段あまり聞けないほどの大声で派手に言い争いをし始めた皆守に苦笑し、葉佩は足元にコロコロと戻ってきた缶コーヒーを拾い上げた。

「甲太郎ちゃんたら、異星人とか好きなんじゃない。んふふ〜」

と呟いて、皆守のポケットにコーヒー缶を戻す。そうしている間も、言い争いは続いている。顔の大きな化粧をしている男子生徒――朱堂茂美と接近遭遇した皆守の怒りと苛立ちは凄まじいらしい。

「……甲太郎兄ちゃん、怖いよね……？」

「……怖い……」

アンリと彩がそう声に出して呟くほど、皆守のイライラは加速しているらしかった。

「じゃあ、お前が女子寮を！」

「そうよ。何故ならアタシはビューティーハンターだから！」

一瞬間が開いた。

「……はい？」

朱堂は構わず叫び続ける。

「さァ、アナタたちもアタシを呼びなさい！ ビューティーハンターとッ！」

「ビューティーハンター茂美ちゃ〜ん」

葉佩は拍手と共に朱堂を呼ぶ。何とも心のこもっていない間延びしたものだったが、それでもよかったのか、朱堂は口元に手を当てて派手に仰け反りつつ高笑いする。

「転校早々、演劇部のトップスタァになるだけのことはあるわねエッ！ 素敵なコ・エ！ そして、何と言ってもイ・イ・オ・ト・コ！」

「……んふふふふ。光栄です」

その口元がどことなく引きつって見えたのは、光の加減か思い込みか、はたまた本当に引きつっていたのか。皆守は「あ〜……ッ！」と苛立たしげな唸り声を上げ、朱堂を睨んだ。

「とにかく、だ！ とつとと俺たちと一緒に来てもらおうか。どうして女生徒を付けまわすのか、その理由を聞かせてもらう」

「アナタたちにアタシが捕まえられて？」

そのとき、葉佩の制服の袖を彩が引いた。傍観していた葉佩が周囲の様子に神経を配ると、どうやら女子寮の中から不穏な会話が聞こえてきている。

「外から男の音がする……」

「例の痴漢じゃないの？」

「何か、武器になるものないかな……」

「私、木刀！」

「弓！」

「金属バット！」

漂う何かの気配に朱堂は「オホホホホ」と笑うと、

「それじゃ、アタシはこの辺で」

「おう、またな——って、そうはいくか阿呆！」

「オ〜ホホホホホホホ！ アタシに追いつけて？ ……シゲミ、ダァァァッシュュッ！」

「……と、まァ、こんな経緯で……」

こっそりと尋ねてきた八千穂を部屋に入れ、葉佩はマグカップの中に沈んでいるカモミールティーのティーバッグを取り出しつつ報告する。

「甲太郎ちゃんが追っかけてってくれてるけど……」

「すっごいすっごい早かったんだよ！ かけっこ早いんだよ！」

「……でも……お化粧……してた……」

彩の常識の中に男が化粧をする——というよりも、オカマというジャンルが存在していなかったらしく、かなりの衝撃であったらしい。

「朱堂か～……ん～…… B組だよ～……」

八千穂は出されたオレンジジュースを飲みながら首を傾げる。

「地顔だったんだねエ……何度も見かけてたけど、インパクトある顔だよ。うん。いつ見ても」
葉佩と八千穂は揃って溜息を吐き、すべて世はこともなし、という顔をしている子供二人を見た。

「……潜る気、満々だね」

「実際、これから潜ることになると思うんだよね」

「へ？」

H. A. N. Tが告げる。

『メールを着信しました』

「ほら来た」

『受信者：葉佩九龍

送信者：皆守甲太郎』

今、墓地にいる。――』

「ね？ ……《執行委員》だよ」

カップの中のカモミールティーを飲み干すと、葉佩は腰を上げた。

「さて、行きますか。早く行かないと、甲太郎ちゃんが怒るよね？ んふふふッ」

「あ」

その申し出は唐突だった。

「パパ、マミーズの唐揚げ食べたい」

というわけで、マミーズ。

「いらっしゃいませエ～！」

舞草奈々子の元気な声が響き渡る。

「こんばんは。……テイクアウトで唐揚げちょうだい」

「はい、わかりましたア」

注文を通し、奈々子は葉佩を見た。

「あ、葉佩くん、特撮物とかお好きですかア？」

「はい？ 何突然」

「あ、ごめんなさい。えっと、今度ウチがスポンサーでやる特撮物のポスターなんですけれど――」

「もらう」

「え？ お好きなんですか？」

「毎週見てる」

「最近の特撮、凝ってますもんね～。葉佩くんが特撮好きでよかったです～。是非是非、周りの人にも視るように勧めて下さいね～。このポスター、差し上げますウ～」

「はいはい」

レジ付近でそんな話をしていた葉佩と舞草の前に、会計を済ませたい男子生徒がやってきた。てきぱきと仕事をこなす舞草の前に立って財布を開いているのは、誰だろう黒塚至人である。食事時でもあの石を抱えているのは大したものだと、変なところで感心する。

店を出ようとした黒塚が、ポスター片手の葉佩を見た。

「おや？ 葉佩君」

「あ、至人ちゃん。こんばんは」

「ふふふふ。こんばんは。……どう？ 今日もいろいろと聞こえてるかい？ 石たちの声が」

「聞こえてるよ。もちろん」

「素晴らしい。素晴らしいよ！ ……石は僕らの友達さ！ そして、僕らも友達さ！ ……これ、あげる。ふふふふふふふ」

二つに折りたたまれたメモ。広げると、黒塚のアドレスとプリクラが挟まっていた。

「ありがとねエ」

「どういたしまして。『彼ら』にはあげたけれど、君にはまだたったからね」

「んふふ。そうでした」

「これから、よろしく。ラララ～、石は何でも知っている～」

上機嫌の黒塚が店を出ると同時に、テイクアウトの唐揚げが葉佩の手元に届いた――という経緯があった。

「熱いから、フーフーして食べるんだよ？」

「うんッ」

「……うん」

つけてもらったフォークを持って、なぜか墓地でピクニックしているアンリと彩――と八千穂。

「……遅エと思ったら……マミーズで唐揚げ買ってやがったのか……」

「仕方ないじゃない。ポスターもらっちゃったから、それを至人ちゃんにお願いしたりしたし……それに、唐揚げはアンリがどうしても食べたいって言うんだもん」

皆守の目が釣り上がっている。

「待たされたこっちの身にもなりやがれ！」

「いひゃいひゃい、ほっぺは、ひっはははひへ」

またもや、両の頬を左右に思い切り抓られる葉佩。

「風邪ひいたら、お前のせいだ！」

手が離れる。葉佩は頬を撫でながら苦笑した。

「ごめんよ～。……土曜日、カレーおごるからねエ。西口のカレー屋さんに行こうねエ～」

「……ツたく……クシュン！」

一つくしゃみをした皆守に、アンリは言った。

「甲太郎兄ちゃんも、着ぐるみ着たら寒くないよ？」

「……着る？」

皆守は子供に向かって怒鳴るわけにも行かず、くるり、と父親の方を向いた。

「はい？ こ、甲太郎ちゃー」

「着るか〜ッ！」

「んぎゃ〜んッ！」

綺麗な上段蹴りに葉佩が飛んだ。

「……え〜と……？」

「な、なななんだよ、この振動はッ?！」

「ちょ、ちょっと九ちゃん！ 『え〜と』 じゃないでしょ?！」

岩屋道。

徐々に下がってくる天井を見上げた葉佩は、「困ったねエ」と頭を掻いた。

「パパ〜！ ドア閉まってるよ〜！」

押しても引いても開かないドア。

「……葉佩、あのレバーは？」

「あ、レバーあるねエ」

「あ、動かしてみる！」

とりあえず、先に進めるであろうドアの前へ移動している間にも天井はジリジリと下がってきている。

「ん〜……！」

八千穂は蛇の形のレバーを押し下げる。

「えいッ！」

パキッ、と何かの音がした。

「あ」

「何だ、その『あ』ってのは……」

皆守の眉間に皺が寄った。

「おい……八千穂……まさかお前、壊した……？」

「こ、壊してないよ！ 普通に下ろしただけだもんッ！」

「じゃあ何で天井が止まらないで下がってくるんだ!？」

「知らないよ〜!？」

「こういうのは止まるもんだろうが！ バカ力女！」

「うるさ〜い！ 何もしない皆守クンに言われたくない！」

カッカとボルテージを高めあう皆守と八千穂の耳に、ボソツとした彩の声が聞こえた。

「……ぺたん……」

ぺたん。

やたらと現実的な言葉の響きである。そう。このままでは『ぺたん』に違いない。皆守と八千穂の口喧嘩も止まる衝撃だった。

「んふふ。困った困った」

暢気な調子で葉佩は笑っている。

「阿呆！ 笑ってる場合か?!」

「パパ～、怖いよ～！」

泣き出したアンリと不安そうにしがみついた彩を両腕に抱え、

「大丈夫だよ。アンリ、彩、大丈夫だよ～。パパが昔行った遺跡はねエ、間違っただけをすれば、ギロチンで首と胴が一瞬でサヨナラしちゃうような場所でねエ……」

いつも通り、のんびりとした口調で葉佩は語る。ただその態勢は、次第に低くなってきているが。

「それに比べたら吊り天井なんて可愛いものだよ～？ んふふ」

そんなことを言っている間に、天井は五人を押し潰さんと下がってきている。

「……這いつくばる状況で、よくそんなことが言えるもんだ」

「九ちゃん……」

「こういうトラップは可愛いって言ってるでしょ。大丈夫」

ガチン、と音がした。

ガラガラガラと音を立てて天井が巻き戻っていく。

「脅しだよ。……あのレバーが壊れるようになっていたのか、壊れたような錯覚を起こさせただけなのか、まア、助かったからよしということで、先に進みます」

本当に怖かったのだろう。アンリは葉佩にへばりついて本格的に泣き出し、彩はホッと胸を撫で下ろし、頭を撫でてくれた八千穂にギュッと抱きついた。

「……まったく……何なんだ、この仕掛け……」

「いい性格してるよねエ。ま、でも、大丈夫。この程度なら全然問題ない。ギロチンの方がすごいんだよ～？」

「……何でそんなふうによくギロチンについて語るんだ、お前……」

「ギロチンっていうのは――」

「わかったわかった！ アンリが泣き止まなくなるから、その辺で止めとけ！」

「はいはい」

一旦葉佩は口を閉じるとアンリを泣き止ませ、皆守の隣に並んで小声で続けた。

「……首が落ちた後、ちょっとの間、意識があるらしいよ？ 以前ね、『首が落ちた後、意識があるようなら瞬きしてくれ』って死刑囚に頼んだ人がいたらしいんだけど、その死刑囚、瞬きしたんだって～」

「……ギロチン、好きなのか……？」

嫌なものを見るような目で葉佩を見る皆守。葉佩は首を横に振った。

「ううん。二度と見たくない。思い出して怖くなったから、甲太郎ちゃんに怖いのを分けてあげただけ。それだけ」

「……」

皆守は溜息を吐いて葉佩を見る。

「分けないでいい、分けないで……」

葉佩は子供の手を引いて、淡々と日本神話を語って聞かせている。

「伊邪那岐さんは、奥さんが死んでしまっても悲しんだ。この間話したよねエ」

「……うん」

「ヒノカグツチのお話だ！」

「そうだね。でね、奥さんを追いかけて黄泉へと下った」

「ヨミって何？」

アンリの声に葉佩は「ん～」と首を傾げる。

「何て説明したらいいかなァ……人が死んだ後、向かう場所、だね」

彩は父を見上げた。

「彩の父と母は、そこにいる？」

「いるよ。きっとね」

「じゃあ……」

彩は続ける。

「彩もヨミに行けば父と母に会える？」

「……」

言葉に詰まった葉佩を見かねたのか、八千穂は「え～い」と彩を抱き締めると持ち上げた。

「彩ちゃん、アンちゃん、そろそろお菓子食べたくな～い？ 下の敵やっつけたから、ここは安全ばいしね～」

グルグルと彩を振り回す。彩は黙ってなすがままになっていた。二周したところで、八千穂は彩を下ろし、小さなバッグから「じゃ～ん！」と新発売されたばかりのチーズケーキ味のお菓子を取り出した。

「これ食べよ～！ アンちゃんにはこっち～！」

アンリは八千穂の差し出したお菓子を見て目を輝かせた。

「これ好き～！」

チョコレートコーティングされた円形のケーキである。

「食べる食べる～！」

お菓子に食いつく子供を傍で見ていた皆守は、悲しそうな顔をして笑っている葉佩を背中から蹴った。

「痛ッ！」

「葉佩、八千穂が菓子であやしてる間に、この部屋の仕掛け解いちまえよ」

「……あ、うん……」

振り向いて、頭を掻き、部屋の隅の石碑の前へ移動する。後ろからのたくたと皆守がついてきた。

「甲太郎ちゃんも、向こうで休憩してていいよ？」

「俺はいい」

「あ、そうなんだ」

H. A. N. Tを取り出してその画面を見つめている葉佩の背に、皆守は言った。

「葉佩」

「うん？」

「あからさまに悲しそうな顔をするな。彩は気付くぞ」

「……」

H. A. N. Tを閉じ、葉佩は頷く。

「わかってるよ」

「わかってない」

「わかってるよ」

「なら、そのシケた面は即刻止めろ」

「わかってるよ」

「俺から見たら、お前は亮太が言うほど酷い親じゃない。彩だってわかってるだろうさ」

「……」

「ほらみろ、わかってねエ」

皆守は鼻で笑うとアロマに火を点けた。

「彩はしっかりしてる。……でも、子供だ」

「……うん。そう、だね」

「死んだ親のことが気になっても仕方ないだろ。……ほとんど覚えてもいない親よりも、毎日一緒にいるお前の方が、ちゃんとした親だ」

「だといいいけどねエ」

うなだれる葉佩の鼻先に皆守の靴底があった。

「……顔、蹴るぞ」

葉佩は慌てて皆守の足を向こうへと押しやる。

「やめてよ！ 定期公演近いんだから！」

「阿呆が……本気で顔は狙わないっての」

「甲太郎ちゃんたら……」

口元にニヤツとした笑いを浮かべ、皆守は背を向け先を歩いていく。

葉佩は大声を出して少し胸のつかえが取れたのに苦笑し、その後を追った。一心不乱にお菓子を食べている彩と、八千穂と歌を歌い出したアンリの楽しそうな姿が目に入る。

その向こうで、皆守が一つのレバーの前で首をかしげていた。

「あ、葉佩」

「ん？ 何だい？」

「このレバー壊れてんぞ」

「ええ～？ ……道具取りに帰らなきゃダメかなア」

「面倒がらずに井戸までひとつ走り行って来いよ」

「ええ～?! 俺一人で?!」

「俺は、休憩する」

「え～?!」

ダメ元で子供らの方を見た。

「いってらっしゃ～い」

とアンリ。

「待ってるね～」

と八千穂。

唯一の希望、常識人に近い彩はというと――

「……」

無言でパタパタと尻尾を振っている。

「……ヒドイよ、ヒドイ……」

天井を見上げ、葉佩は溜息を一つ。

ちょいちょい、とアサルトベストが引っ張られた。

「……父、一緒に行く」

「彩～！」

葉佩は彩を抱き締め、そのままひょいっと軽々抱き上げてニッコリ笑う。

「一緒に行こうね！」

「……うん」

彩を下ろし、手を繋いで来た道に戻る。

王の間を出たところで、彩は足を止めて葉佩を見上げると、故郷の言葉でこう言った。

「死んだお父さんお母さんよりも、一緒にいてくれるお父さんと、優しいお母さんの方が大事」

そして、俯く。

「……ごめんなさい」

皆守の言っていたことは正しかった。彩は、よく見ている。葉佩が泣きそうな顔をして微笑み、彩の傍に屈んだ。

「謝ることないよ。黄泉に行くって言ったから、そんなのやだなって思っただけ。それだけなんだよ……」

髪を撫で、抱き締める。

ただ、死んだ人間に嫉妬しただけだ。

けれど、そんなことは彩には言えない。

「パパとママはね、彩がいてくれれば、それ以上に嬉しいことはないよ。謝ることなんて、これっぽっちもない。……彩がパパの子供で嬉しいよ」

顔を上げて小さく微笑んだ彩を見て、葉佩も笑う。

ドアを開けると、闇。

「みぎゃ～んごもごぶべ～！」

泣き出すアンリの口を手で塞ぎ、皆守は葉佩に言う。

「また暗闇かよッ」

「俺に言われてもねエ」

声の反響の度合いで、このフロアがかなり広いということはわかる。暗視ゴーグルの電源を入れず

葉佩は銃に弾丸を装填しつつ苦笑交じりに答えた。

「あれ？ ねえ、皆守クン。……彩ちゃんは？」

八千穂の声に、皆守は「はァ？」と八千穂の方を向いた。

「お前、手、繋いでたんじゃなかったのか？」

「皆守クンと一緒にいたじゃない」

「おい、アンリ。お前と彩、手は繋いでなかったのか？」

「知らないよォ……ヒック……ヒック……」

「ちょ……！ 彩いないの?!」

叫ぶ葉佩の耳元で、H. A. N. Tが冷静に『敵影を確認』と告げた。

「彩ッ?! いたら返事しなさい！」

化人の蠢く気配と、くぐもった声が聞こえる。遺跡全体に響くような声で、葉佩は呼ぶ。

「彩！ どこ！」

こんな状態では冷静な対処は出来ない。

「は、葉佩ッ！」

皆守の手が葉佩の腕を掴むより早く、横合いから迫ってきた采女から右側頭部に強い攻撃を食らう。衝撃と自分の血の臭いに我に返り、葉佩は腰に差していたコンバットナイフを抜いた。すぐ傍に采女が立っている。人工的な青白い肌が闇に浮いていた。

「……ッ！」

ナイフを振り上げ、突き刺す。ズグッ……という肉にナイフが沈み込む感触。一気に引き抜き、横薙ぎに払う。血液の代わりに光が立ち昇るが、葉佩は光の中、更に前進してもう一体の采女も撃破する。

「く、そ……ッ」

痛みは引かない。傷はすでに塞がっているが、ひどい痛みで膝が笑う。

「……」

頭を押さえてその場に膝をついていた。

「……父……」

彩の声。すぐ傍で聞こえた。

「彩……そこにいるのかい？」

「……お話、してた……」

「誰と……？」

「優しい、男の人……」

「……？」

「父……」

「まだ敵がいる。甲太郎ちゃんたちと一緒にいなさい」

「……うん」

葉佩の背後の八千穂と皆守の声が響いた。

「クソッ！ 壊か……！」

「いっくよ〜！」

「そんな攻撃が効くか！」

「足止めになればいいよ！ 九ちゃん、急いで！」

スパン！ とテニスボールを打つラケットの音が聞こえる。

「……まったく……情けないねエ……俺は……」

暗視ゴーグルをつけ、葉佩は彩の手を取る。

「無事でよかった」

「……父……」

「明日香ちゃんと甲太郎ちゃんから、離れちゃダメだよ」

「……うん」

ジリジリと焼きつくような痛みに神経が悲鳴を上げるが、葉佩は笑った。

「お仕事しなきゃね」

装填済みのM92FMA YAを両手に、壊の前へ踊り出る。

次の部屋に続く扉の前、彩は扉に額をつけて向こう側を探っていた。

「……いる……」

「じゃあ、ごめん、少し、休ませて……」

ウエットティッシュで血液だけ拭い、葉佩は「はァ」と大きな溜息を吐いた。アンリは普段では決して見ない父の姿に縋りつき、その腕の中で違う泣き方をしていた。

「大丈夫だよ。大丈夫。何ともないよ」

痛みはようやく引いてきている。薄らと見える皆守と八千穂も、九龍を不安そうに見つめていた。

「本当に平気なのか？」

「九ちゃん、無理しないで」

「俺は平気だよ。大丈夫」

彩は父の傍で、黙って俯いた。皆守の手が彩の頭の上にぼふん、と載せられる。

「黙って離れるな」

「……ごめんなさい……」

「親父のこんな姿、見たくないだろう？」

「……うん」

ふ、と息を呑む音。泣きたいのを我慢しているに違いない彩は、着ぐるみの袖で涙を拭った。

「アンリ、もう、平気だよ」

「……うん……」

「行こう。……茂美ちゃんが待ってるからね」

皆守はアロマに火を点けて大きな溜息を吐く。

「……待たせとけ、あんなオカマ」

八千穂はぶんぶん頭を横に振った。

「待たせちゃダメだよ！ 覗きの犯人なんだから！」

「あ、会いたくねエ……」

呟いた皆守の横に立つと、葉佩は「んふふ」と笑って扉に手をかけた。

「行こう。……進もうよ」

「オ～ホホホホホホ！」

朱堂の笑い声が化人創生の間に響き渡る。

ピコン！ と彩とアンリの猫スーツの尻尾が逆立った。葉佩の後ろから恐々と朱堂を覗いている。

「若い男を夢中にさせるアタシ……なんて罪なオカマ！」

「……若くないがなァ……葉佩は……」

冷え冷えした皆守の声に、朱堂は葉佩を見る。

「アタシには、演劇部のトップスタアが見えるけれど、大和ちゃん並みに年なのかしら？」

「……その後ろにいるちっさいのが見えてないのか」

イライラとアロマに火を点け、皆守は朱堂を睨む。

「あら、ホント。何か可愛らしいものがー」

「可愛い?! ホント?! 俺の子供だよ～」

自分の子供が褒められるならば、敵でも何でもいいらしい。葉佩は手放しで朱堂に微笑む。

「んふふ～。ありがとね～。可愛いよね～。アンリも彩も。当然だよ～」

朱堂は大仰に目を見張る。

「……って子持ち?! 何てこと……ッ?!」

「ツッコミ遅エよ」

皆守の凍りそうな声。八千穂のラケットが葉佩の後頭部をコツンとつついた。

「九ちゃん、遊んでないで、そこの覗き魔やつつけちゃってよ！ 女子寮のみんなの前に突き出さなきゃ！」

「あ、そうでした」

流れるような手つきでハンドガンに弾丸を装填していく葉佩を見ながら、朱堂は「オホホホホ」と笑っている。

「さすがね、葉佩ちゃん……イイ男は何をしてもス・テ・キ！」

皆守はイライラとアロマの灰を落としながら、「気持ち悪い……気持ち悪い……」と呟いている。

「イセージンじゃないの……？」

「ウチュージン……違う……？」

顔を見合わせてゴショゴショと話しているアンリと彩に、皆守は言った。

「ありゃ、残念ながら人類だ。……そうは見えないが」

「ムキィーッ！ アタシは人間よオーー！」

「……お面みたい……」

「……怖い……」

ますます小さくなって葉佩の後ろに隠れるアンリと彩。

「オ～ホホホホホ、折角のイイ男だけれど、《墓》の存在を知ったからにはアタシは葉佩ちゃん、アナタを処罰しなきゃならないの。アタシは《生徒会執行委員》だから」

「うん、そうだと思ってた」

タン！

容赦なく、葉佩のハンドガンが予告なしに火を噴いた。

「痛エ！」

男らしい声がする。「ぷふ～ッ！」と葉佩は口を押さえて笑った。

「ん、んふふ。……茂美ちゃん、面白い……」

「あ、あたしもやる～！ いっくよ～！」

「ちょ、ちょっと待ちなさ～い！ アタシの特殊能力の説明を――！」

「やっちまえ、葉佩、八千穂。俺たちはこっちで菓子でも食ってるわ。隅に行こうぜ。アンリ、彩」

「了解～」

「よ～し！」

「待ってって言ってるじゃない！ 痛いッ！ イタイイタイッ！ いいわよ！ もう許してあげないんだから！ ――葉佩九龍、アナタのハート、もらいます。……って痛エ！」

「んふふふふふふふ。俺の心はあの人だけのもの。誰にもやりません」

重なる単発の銃声。

なし崩し的に始まった朱堂戦を横目で見ながら、皆守はアンリと彩の手を引いてギャグマンガのよな朱堂と葉佩と八千穂のやり取りを眺めている。

「……パパ、楽しそう」

葉佩は現れた宇萬良の眉間に確実に銃弾を浴びせながら、朱堂も攻撃している。器用なものだった。

「明日香お姉ちゃん……楽しそう……」

八千穂は徹底的に朱堂に向けてスマッシュを食らわせている。

「弱い者イジメには見えん図だな。何だかんだで、朱堂もやり返して――」

ダーツが八千穂に向かって飛んでいく。だが、八千穂はその程度でやられる女ではなかった。ギリと鋭く光る視線はダーツを見据え、ラケットを構え直す。

「リターン食らえ～！」

インターハイを制した彼女のラケットはダーツを打ち返し、ダーツは朱堂めがけて飛んでいく。

「あっは～ん！」

命中した。皆守の目が呆れ果てたような色を宿しているが、朱堂相手にツッコミを入れる気力も湧いてこないらしい。

「……ま、いいだろう。朱堂にはいい葉だ」

彩が、す、と朱堂を指差した。

「……来る」

「《黒い砂》か」

顔く彩。アンリは父の方に駆け寄った。すでに周囲は加賀智に囲まれている。彩を軽々と抱き上げ、皆守は葉佩の隣に並ぶ。

「こっから、本番だ」

「ん。わかってます」

再び銃弾を装填し、葉佩は「んふふ」と笑った。

「.....」

「.....」

「.....」

「.....」

葉佩とその息子二人、皆守は、八千穂からコテンパンなまでの暴行を受ける朱堂を眺めていた。

「あまりに一方的なんだけど、これは茂美ちゃんの自業自得だよねエ」

「ああ、その通りだ」

「可哀想だよ.....」

「.....明日香お姉ちゃん.....強い.....」

「アンリ、彩。いいですか？」

葉佩は言う。

「悪いことをすると、ああやって必ず自分の身に返ってきます。.....それを因果応報というんだよ。

いいかい、よく覚えておいで。.....茂美ちゃんみたいになりたくなかったら、悪いことはしちゃダメ

だよ。お尻叩かれるくらいじゃ済まないのが、現実だからねエ」

「.....う、うん.....わかった.....」

アンリは残像が残りそうな速さで首を縦に振る。彩は怯えたような目で傍にいた皆守にしがみつ

。

「悪いこと、しない.....」

「ああ、そうしろそうしろ。八千穂に拳と蹴りでボコにされたくなかったらな」

ぽふぽふ、と彩の頭を撫で、皆守はアロマに火を点けた。

「アロマが美味いぜ.....」

結局、八千穂の気が済むまでボコボコにされた朱堂は、プリクラと引き換えに女子寮の人々に突き

出されることなく済んだ。

「.....というか、これだけやられたら二、三日、寝込むだろ」

皆守の総括がすべてを物語っている。

翌日。

皆守は保健室のベッドの上でゴロゴロしていたのだが、他の生徒がいないことをいいことに、ベッドに潜り込んできたアンリと彩に場所を空けつつ欠伸をする。

「茂美姉ちゃん、痛そうだったね」

「痛い……」

「まったくだ。……八千穂は何であんなに凶暴なんだろうなァ……」

うつらうつらしながら、洗濯に出している猫スーツの代わりにピンク色の怪獣スーツを着た二人を抱え、

「あ～、あったけェ……」

と呟いた皆守は、そのまま眠りに落ちていた。

それからしばらくして――

「誰が……誰が凶暴ですって……？」

怒りを押し殺す八千穂の声で目が覚める。

「ふァ～あ……んだよ、うるせェ……」

「誰が凶暴なのよ!? 皆守クンッ?!」

ガッと襟首を掴まれ、ようやく覚醒する。

「う、うおッ?! 何だよ、八千穂?!」

「誰が凶暴なの? 言ってごらんさァい? 怒らないから」

「甲太郎兄ちゃんがそう言ってたんだよ」

無邪気なアンリの声。

「言った……」

頷きながら言う彩の声。

「んふふ～。甲太郎ちゃんたら、うら若き乙女に向かって、そんなことを言っちゃダメだよ～」

葉佩はいつも通り「んふふ」と笑い、アンリと彩の前に弁当を広げている。

「皆守、失言だったな。フッフ……」

瑞麗の声もする。

八千穂に告げたのが誰なのか、確かにそれを知りたい気持ちもあるのだが、今は目の前の八千穂の怒りをどう逸らすか、それだけを頭をフルに回転させて考えることにした。

「言葉のあやだ」

「……へ～、ほ～」

「だから、離せ」

「九ちゃん」

「はいはい？」

「そこのカレーパン、食べていいよ。限定だけど。折角見つけたから皆守クンに買って来たけど、食べていいよ」

「おやおや、限定カレーパンかい。……一日二十個なんだったねェ。外のコンビニには結構あるけ

れど……」

「お、俺の限定……！」

「それとも、プリンカレー、ご馳走しようかなァ」

「それはやめてくれ！ カレーが死んじゃう！」

何となく、朱堂の気持ちが変わった気がした皆守だった。

新宿西口一々方。

「カレー……！」

「……パン」

「パンじゃない。ナンだ」

「何だ？」

「違う！」

皆守とアンリ、彩の漫才のようなやり取りを聞きながら、葉佩は笑っている。

「初めて見るんだもんねエ」

「初めてなんだ？」

「うん。今までカレーっていったら、カレーライスだったわけだし」

「でも、アンチャンたち、いたのは中東なんでしょ？」

「……そうだよ？」

一瞬返答に間が空いた九龍に、八千穂は両手を合わせる。

「あ、ごめん、九ちゃん……」

葉佩は八千穂に微笑む。

「ううん。いいよ。気にしないでいい。……でもほら、食糧事情がよくないわけだし、食べられるものなんてたかが知れてたからねエ、こんなに美味しい煮込み料理は食べてないでしょ。料理の名前も違うしね」

「あ、そっかァ……」

「明日香ちゃん、そんな顔しないで」

笑う葉佩は八千穂の頭を撫でる。彼らの正面には皆守と子供たちが座っている。子供たちはカレーを一生懸命食べているが、彼らの面倒を見るのはやはり皆守である。

「葉佩、お前の仕事だろ！」

「だってエ、アンリと彩は甲太郎ちゃんと一緒にいたいみたいだし」

「一緒！」

「一緒」

両側から抱きつかれ、皆守は右手を額に当てて溜息を吐く。

「土曜の夕方に甲太郎ちゃんたちが来てくれると、アンリと彩はとっても喜ぶから。俺も嬉しい」

「九ちゃん、ありがとねッ。そう言ってもらえると、あたし、嬉しいなッ」

「んふふ。いつも感謝してます」

タンドリーチキンを解体しながら、葉佩は言う。

「帰りに、本屋さん寄ろうか」

「DVD買う〜！」

「……彩、ゲーム……」

「ん。お店が開いてたらね」

「塊転がすのは終わったの？」

尋ねた八千穂に彩は答えた。

「……終わった。……王様、少し大きくなったって言った」

「よかったね〜」

彩はコクンと小さく頷き、父が解体した鶏肉をフォークで突く。そして、それを頬張ると、嬉しそうに笑った。

欲しいものを買ってもらった子供たちはご満悦で、家に帰ってくると早速袋から出して遊び始めた。

「DVDは後でも見られるもんッ。まずゲーム！」

今度買ってきたのは、村の中で動物とコミュニケーションを取りながら、家具を集めたりするものだった。

「また、ハードが増えた……」

呆れたように皆守は言う。

「仕方ないじゃない。別ハードなんだから」

ようやく乾いた猫スーツを畳みながら葉佩は苦笑した。

「彩はこっちのお家？」

「うん」

「じゃあ、僕、こっちのお家もらっていい？」

「うん」

無邪気な声。

このゲーム、ポチポチと借金返済をしながら一人暮らしを満喫するという、見た目に反して妙なところで現実的なものである。

「あとで、彩にいっぱいお手紙書くね！」

「彩も書く。日本語、勉強」

「いっぱいお手紙交換しようね！」

「うん」

猫耳と猫尻尾のついたパーカー——アンリは白猫、彩はトラ猫模様——の耳と尻尾が、二人の動きに合わせてピコピコ動いていた。

そんな子供たちを眺めていた葉佩は何かを思い出したのか口を開いた。

「……そういえばねエ」

「どしたの？ 九ちゃん」

甘いミルクティーを飲みながら八千穂は首を傾げる。

「この間、矢印に合わせて踊るゲームってのをアンリと彩がやってたんだけど、すごいねエ。一回やったら覚えちゃうんだもん。周りで見てたお前さんたちくらいのコがビックリしてたっけ」

「……動体視力と反射神経がいいんだろ。あと、三十路では不可能な柔軟さだな」

「俺は柔軟ですッ！」

「じゃあ、今度、あの二人と一緒に踊ってみろよ。……お前、遺跡探索以外はてんで鈍いだろ」

「お、音感と、リズム感は大丈夫だもん！」

「『もん』言うな！ キモイ！」

スパーン！ と皆守は葉佩の頭をハリセンで殴る。

「どっから出したの……」

やたらといい音のハリセンに叩かれた部分を撫でながら、葉佩は訊いた。皆守は「ふ……」と口元を歪め、

「企業秘密だ」

の一言でそれ以上答えようとはしなかった。

「……」

彩は父のベッドで目を覚ました。隣に眠っているのは皆守。昨晚泊まったからだ。大概、葉佩は居間に適当に転がって眠っている。皆守は葉佩のベッド、八千穂は彩とアンリのベッドだ。

その場合、皆守と彩と一緒に眠り、八千穂とアンリと一緒に眠る。

彩はベッドから起きると、そうっと部屋の外に出た。そのままの足で居間に入り、蓑虫のように布団にくるまり、何かの幼虫のように丸まって眠る父の横に正座する。

掛け布団の外に出ていた浴衣の袖を引いた。

「お腹空いた……」

「ん～……」

「父……お腹空いた……」

体を揺すってみたが起きない。手を止めて、時計を見た。七時半を指している。

「父……」

「……ん……」

もう一度呼んだが、無駄。

彩はアンリと八千穂がいる自分の部屋に戻った。

「……むによ～」

「……アンチャン、ダメだよ～、それは食べられないよ～……」

まだまだ夢の中から出てきそうもないアンリと八千穂を横目に見つつ、服を着替える。

犬の垂れ耳がついたパーカーを着て、ジーンズを履くと、彩のお宝箱から五百円玉を取り出した。

小銭しか入っていない小さな財布に足す。

「……鍵……」

いつもの場所に置いてある。

羊リュックを背負い、彩は「うん」と頷いた。

「彩、みんなの朝ご飯、買う……」

そっと玄関を出た。

エレベータでエントランスへ。

「おや、彩くん？」

「……おはよう」

大股で近付いてきた管理人が腰を屈めて彩の頭を撫でる。この人も《ロゼッタ協会》で生きているということを考えると、元々は《宝探し屋》辺りをしていたのかもしれない。普段は前髪で隠れているから見えなかったが、こうして近くで見て初めて、額に大きな傷があるのに気が付いた。

「今日は一人かい？」

「彩、お腹空いた。おつかい」

「へえ、それは偉いね。気を付けて。何かあったら大声を出すんだよ。俺は掃除してる間はここにいるから、すぐに駆けつけてあげるよ。これでも、射撃の腕前は《協会》の折り紙付きだ」

「ありがとう」

小さく頭を下げ、彩はコンビニに向かうことにした。

ぼてぼてぼてぼて……

初めて一人で外を歩いていた。道は覚えている。しかし、周りに誰もいないというだけで、風景が少し違って見えた。

日曜の朝。八時前。住宅街ということで、人気がないわけではないが、心細いのは確かだった。

「……コンビニ……」

いつものコンビニ。

ぼてぼてと店内に入り、籠を持ってパンを物色する。

「……七百円……」

手持ちは七百円。菓子パンは一個百二十円。人数分買うと少々かったるい。食パンなら安く上がる。

「……四角パン」

食パンを一斤。傍の冷蔵庫の中には彩のお気に入りのチーズデザートがあるが、ちょっとだけ我慢する。

「……アイス……」

アイスも人数分は買えない。

「彩、クエスト……」

クエストをすればお金が入る。父がそうやって生活していると言っていたのを思い出し、「クエストをしなければアイスを食べられないのだ」と一人頷く。

仕方ないので、チョコレートクッキーとチーズクッキーを一箱ずつ籠に入れる。

七百円で足りた。彩は少し嬉しくなる。

「おつかい出来た……」

珍しくその顔に「ほにょん」とした微笑を浮かべ、来た道に戻る。

楽しかった。

嬉しかった。

「僕でも誰かの役に立てるんだ」と彩の足取りは軽い。

そんな彩の横にゆっくりと一台の車が止まって、助手席の窓が開いた。

玄関のドアが開き、閉まる音。

「……？」

葉佩はよれっとした浴衣を直しつつ、玄関の方へ向かう。

「ん～……？」

玄関で靴を脱いでいるのは、彩。

「はうあッ！」

一気に目が覚めた。コンビニ袋を下げた彩はニコニコしながら葉佩に抱き付いた。

「ただいま……」

「た、『ただいま』って……」

「パン、買った……」

「ひ、一人で……？」

「お腹空いた……父、起きない」

「……」

「四角パン……クッキー二個」

「……」

「父？」

褒めてくれないの？ と彩の視線が訴えかける。

「あ、い、いや、彩。あのね――」

猛烈に嫌な予感がした。このパターンはロクな事が起きない。

最近、日曜日と言えれば決まって訪れる来客があるではないか！

ピンポーン……

インタフォンが鳴った。

「キタァーッ！」

葉佩の叫び。彩はそんな父の横を通り、インタフォンに出た。

「亮太お兄ちゃん……」

「彩、開ける」

「うん」

「うむ。いい子だ」

葉佩の部屋のドアが開く。全身から不機嫌オーラを放出している皆守が現れた。

「うるさいッ！」

ズガンッ！ 皆守の踵落としが葉佩の頭頂部に綺麗に入る。

「……」

床に倒れ伏し、プシュ～……と煙を噴いていそうな父の姿を横目に、彩は皆守のパジャマを引いた。

「おつかい……した」

「……」

「パン、買った」

「……そうか。一人で行ったのか？」

「帰り、亮太お兄ちゃん、車乗った」

「そうか。帰りは楽だったな。……なァ、彩。次からは、誰か誘えよ？」

「うん」

ピンポン。

ドアチャイムが鳴った。

「ヒィーッ！」

葉佩の悲鳴。頭を押さえ、よれよれの浴衣のまま玄関先で凍りつく。ドアを開ける彩は入ってきた亮太にコンビニの袋を見せる。

「亮太お兄ちゃんのご飯、ない」

「問題ない。食べてきた」

彩を抱き上げた亮太は、廊下でガタガタ震えている葉佩を一瞥すると、

「朝食は彩が用意してくれたようだ。……ゆっくり話をしようじゃないか。『兄さん』」

「ヒ……ッ！」

いろいろな意味で恐ろしかった。

起きてこない八千穂とアンリを放って、彩、葉佩、皆守、一つのテーブルを囲んで朝食を食べている。コーヒーだけ飲んでいる亮太がやはり朝食を作った。

オムライス好きなアンリと彩のため、卵は切らさず冷蔵庫に入っている。ツナ缶と刻んだ浅葱があったため、ツナと浅葱を具にして出汁巻き卵焼きを作った。キャベツの残りが四分の一個。それを刻んでざっと茹でた。そして、デザートに簡易牛乳プリンを彩とアンリと八千穂の三人分作る。

所要時間、十五分。葉佩がやったら、三十分以上かかる。

フルーツ牛乳を彩のグラスに注ぎながら、亮太は葉佩を見る。

「彩が一人で表に出ていると思わなかったが」

「あ、あ、ァ、うん」

カクカクカク……という動きで首を縦に振る葉佩。

「なぜ一人で外に出たのだ？」

亮太は隣に座る彩を見る。彩は素直だった。

「彩、お腹空いた。父起こしたけど、起きなかった……」

「ほほオ……」

皆守はコーヒーを飲みながら、まだよれよれとした浴衣のままにいる葉佩を見る。かく言う皆守も着替えてはいないのだが。

「……寝つきはいいが、寝起きが悪いんだ。葉佩は」

「こ、甲太郎ちゃんに言われたくないよ……！」

彩は残っていた食パンでフレンチトーストを作ってもらい、それを美味そうに食べている。アンリの分はキッチンで待機中だ。

「……美味しい……」

「そうだろうとも。俺様が作るのだ」

彩の頭を撫で、亮太は言う。

「ボンクラ……どうして子供の声が聞こえんのだ」

「あ～あ。葉佩がだらしがないから、『兄さん』からボンクラに逆戻りだな」

皆守はブラックコーヒーの入ったカップをテーブルに戻し、「ふぁ～あ」と大きな欠伸をする。

「葉佩のせいで随分早起きしちまった。……亮太にしっかりと苛められたらいい。人の安眠を妨害した報いだ」

「ヒ、ヒドイよ、甲太郎ちゃん……！」

ガチャッと音がした。

「あ～……よく寝た～……」

着替えてはいるが、まだ頭がボサボサだった八千穂は、亮太がいるのを見て「キャッ！」と声を上げる。

「うわ～、恥ずかしい姿を見せちゃったよ～……」

それを聞いた皆守は葉佩の膝を叩いた。

「……俺たちは、『キャッ』には入ってないな」

「ああ、男として認識されてないんだと思うよ～。ま、俺は宮美さんがいるからいいんだけ——」

横顔に痛い視線。

亮太が睨んでいた。

「姉さんが、どうかしたか？」

「い、いえ、特には……？ んふ、んふふふふふ、んふふふふ……」

引きつる口元を手で伸ばしながら、葉佩は八千穂に視線を移す。

「パン、焼くかい？」

「ん～、そのまんまでいいよ～」

「アンリは？」

「涎たらして寝てた。可愛いよね～」

「……ちょっと、いい加減起こしてくるよ。もう八時半だし」

立ち上がった葉佩に、亮太は言う。

「これからDVDを買いに行くから起きろと言えば飛び起きるぞ」

「物で釣らないでくれよ、人の息子を」

くわッと威嚇してみるが、葉佩では威嚇にならない。呆れたような亮太の溜息と、皆守がコーヒーを啜りながら彩の口の周りを拭う音と、八千穂がグラスにフルーツ牛乳を注ぐ音だけが響いた。

「.....行ってきます」

空しい呟きを残し、葉佩は子供部屋に入る。

「アンリ～。朝ですよ～」

八千穂の言うとおりの枕に涎の海が広がっている。

「おやおや、枕カバーを洗濯しなきゃねエ」

苦笑して、アンリの髪を撫でる。

「アンリ～。亮太が遊びに来てるよ～。朝ご飯、みんな食べちゃってるよ～」

「うにゅ～.....」

目をこすり、むっくりと体を起こす。

「.....」

口から涎がぼたぼたとパジャマに落ちる。

「あ～あ～.....もう.....お兄ちゃんなんだからね、アンリ。しっかりしっかり」

「パパ～.....ぎゅ～して～」

「はいは.....ギャ～！」

アンリは父の浴衣で口の周りを拭うと、抱きついたまま再び目を閉じて「ス～.....ス～.....」と寝息を立てている。

「.....連れてっちゃお～」

連れてこられた居間で昼寝用の小さい毛布に包まれたアンリは、八千穂と彩に突き回され、目が覚めた途端にくすぐり地獄に陥ることになるのだが、それはまた、別のお話。

何か、非常にいびつなかまぼこが乗った建物が描かれている。

「モスク～」

クレヨンで手をべとべとにしなが、アンリは笑う。彩は首を傾げた。

「.....行ったことない.....」

「孤児院の中から出たことなかったもんね～、彩は。移動も車ばかりだったし」

黙ってうなずいた彩を眺めつつ、彼の羊を突きながら八千穂は言った。

「日本に来てからの風景描いたら？」

「日本.....」

彩は鉛筆を持って、何の絵を描き始めた。

「.....これは.....？」

尋ねた八千穂に彩は答える。

「ガラスのお家.....学校にある.....」

「……温室か」

緑茶を啜っていた亮太が顔を上げた。コアラを枕にしてだらけていた皆守が亮太を見る。

「あ？ 亮太よく知ってるなァ」

「ああ。俺様は天香学園卒業だ」

ずずず〜ッと茶を啜る音が響く。皆守は飛び起きて八千穂と顔を見合わせた。

「嘘ッ！」

「お前いくつだ?！」

「こんなことで嘘を吐くものか。俺様は現在二十六だが何か？」

「……若く見えるな」

「てっきりあたしたちと同じくらいかと……」

「大学は出ているぞ。スキップしているから、二十一の時には《ロゼッタ》にいた」

「スキップってことは――」

「外国の大学？」

「ああ」

亮太が出した大学名は、何人ものノーベル賞学者を出したような有名校である。再び、八千穂と皆守は顔を見合わせる。

「亮太くん、頭いいんだねエ」

「姉さんの方が賢いぞ」

「出た……姉自慢だ」

うんざりする皆守を無視して、亮太はとうとうと語り始める。

「姉さんは海外暮らしを――」

約三十分にわたり、亮太の話は続いた。

「ただいま〜」

「パパ〜。おかえりなさい〜い！」

「父、おかえりなさい……」

ぬいぐるみを抱えてドタドタと走って玄関へ。

「近所のカフェで美味しそうなケーキがあったから買って来たよ〜。あと、お昼の材料も――」

居間に入ってきた葉佩は、長い話に撃沈した皆守と、「ふんふん」と熱心に聞いている八千穂の対照的な姿に首を傾げる。

「おやおや、どうしたの？」

「亮太くんのお姉さんの話を聞いてたの」

「ああ、宮美さんの……」

「……気安く呼ぶな、ボンクラ」

「酷い……」

葉佩は溜息を吐くと、ケーキを冷蔵庫にしまうため、キッチンに向かった。

「亮太は苦手だよ～……いつになったら認めてくれるのかなア……」

父のぼやきは、後ろからついてきていた彩に聞かれていた。

「……父、亮太お兄ちゃん嫌い……？」

「わ……ッ！ ……彩、いたんだ……」

コクリ、と彩は頷く。

「嫌いなんじゃないんだよ。パパと意見がちょっと食い違うだけ」

腕を広げ、彩を抱きしめる。

「よかった……みんな、仲いいのがいい。彩、楽しい」

「そうだね」

葉佩は頷いて彩を抱き上げる。

「《汝自らを愛するが如く、汝の隣人を愛せ》……『自分を大事にするように、周りの人も大事にしましょう』そういう意味の言葉があるんだよ。彩はちゃんとそういうことが出来てるねエ」

「父は、出来てない」

「手厳しい……」

苦笑した葉佩は彩に言う。

「『いつか出来るようになったらいいなア』って、パパ思ってるよ」

「うん」

額を合わせて微笑む。

「さ、向こう行こうか。甲太郎ちゃんを起こして、カレー作ってもらおうね」

「カレー食べる」

「ん。よしよし。叩き起こしましょう～」

数日後。

理科室――放課後。

「リカ姉ちゃんの作るお菓子美味しいね～」

「ありがとうございますウ。そう言ってもらえると嬉しいですウ～」

どうして子供たちが理科室にいるのかというと。

葉佩と皆守が雛川に職員室に呼ばれたのをアンリと彩は保健室の戸の隙間から見ていた。

「ったく……俺が何をしたって言うんだ……」

「俺、そんなに授業サボってないよ～？」

「うふふ。二人とも、身に覚えがないとでも言うのかしら？ その辺り、ゆっくり聞かせてもらおうね」

「……」

「あう～……」

ガラッ、ピシャッ！

容赦なく閉まる職員室の戸。

アンリと彩は、「長くなりそうだ」と頷きあうと、瑞麗に「理科室に行ってくるね～」と言い残して廊下に飛び出した。いつもの猫スーツは当然着用済み、そして、背中にはぬいぐるみリュック装備済みだ。

そんなわけで、リカに構ってもらっている。

「今、新しい着ぐるみを作っているんですウ～。気に入ってもらえたら嬉しいですウ」

「どんなの？」

クッキーを口に入れながらアンリは訊く。

「お楽しみに、ですウ」

「……楽しみ」

彩はリカの淹れたミルクティーを飲みながら、コクリと頷いた。アンリはプウッと膨れ、

「知りたい～！」

と足をバタバタさせるが、リカは「フフフ」と笑うだけで、それ以上は教えてもらえない。

「いいも～ん。楽しみにしてるもん」

「それがいいですわア」

クスクスと小さく微笑むリカ。

アンリと彩の頭を撫でると、楽しそうに追加のクッキーを皿に出した。

「凹むねエ……」

「……はア……」

葉佩と皆守は職員室を出ると、そのままの足で保健室に入った。

「ルイちゃア～ん。亜柚子ちゃんがいじめるんだよ～」

泣き言を言う葉佩に、瑞麗は煙管をコン、と灰皿に叩き付けた。

「うるさい。身から出た錆だ」

「酷いなア……」

「ガキどもは？」

「理科室に行くと言っていた。椎名のところで茶でもご馳走になっているんじゃないか？」

「ああ、午後のティータイムだねエ。……と言っても、もう四時半回ってるから、お夕飯食べられなくなっちゃうなア。いいところで彩が気付いてくれればいいんだけど……」

「無理だな」

皆守はプカリとアロマを燻らせる。

「彩も何だかんだで食い意地張ってるからなア」

「……も～……ちょっと迎えに行ってきます」

「俺は待ってる」

「ああ、行ってこい。子供らの荷物はまとめておいてやろう」

「ありがとね、ルイちゃん。甲太郎ちゃん、すぐに戻ります」

ニッコリ笑った葉佩は保健室を出た。

「美味しかった〜」

アンリはプハッと紅茶を飲みほして笑う。

「ウフフ。たくさん食べる子は大きくなれますよォ」

「じゃあ、僕、大きくなれる？」

「ええ。なれますウ」

彩は「けぷッ」としながら、満足そうにお腹をさすっている。アンリほどは食べないが、おやつ分量としてはかなり食べたのではないだろうか。

「こんにちは〜。リカちゃん、いますか〜？」

「あ、九龍クンですわァ」

リカは微笑んで葉佩に手を振る。

「パパ〜」

「父……」

猫スーツの尻尾がびるびる動いていた。

「迎えに来ましたよ〜……って！」

アンリも彩も、随分満足げな顔をしている。

「どのくらい食べたの?!」

「たくさん」

「……お腹いっぱい」

「……あァ……そ、そうなんだァ」

葉佩は若干引きつった笑いを口元に浮かべ、アンリと彩の頭を撫でると二人の手を取った。

「じゃ、帰りましょう。リカちゃんに、ありがとうと、バイバイしようね」

「うんッ。……リカ姉ちゃん、ご馳走様でした！　ありがとう〜！」

「ご馳走様でした……ありがと……」

「お粗末さまでした。ウフフッ。またいらしてくださいまし」

「うんッ！　じゃあね〜！」

「……ばいばい」

手を振るリカに葉佩はニッコリ笑って「いつもありがとね。また明日」と頭を下げ、光学迷彩発動中の二人を連れて保健室に戻った。

「はい、ただいま〜」

「ただいま、ルイせんせ〜！」

アンリは真っ直ぐ瑞麗に飛びつき、彩は皆守を見上げる。

「……甲太郎お兄ちゃん……怒られた……？」

「う……お、怒られてない。注意されただけだ……」

「そうだよねエ、注意されただけだよ〜」

都合が悪いことは、いい方の解釈に乗るに限る。

「……そうなの？」

彩は首を傾げて父と父との友人を見た。

「そ、そうだよ～」

葉佩は遠い目をしながら、皆守はムスツとした顔をしながら、揃って溜息を吐く。

誤魔化しにもならない。

光学迷彩猫スーツを着て、二人はぽてぽてと校舎を散歩していた。

「何か、最近変だね～」

アンリは小声で彩に言う。

「あの教室に、そろそろ人が入ってくよ？」

朝、昼休み、放課後。

決まった時間に生徒が集まってくる。二人は最近その様子を見に散歩コースにこの教室を入れていた。

彩は教室のドアに書かれている日本語に首を傾げる。

「……読めない……」

アンリにも無理だった。

ひらがな、カタカナ、簡単な漢字は読めるが、難しい漢字まで覚えていない。

「ん～……あとでルイせんせ～に聞いてみよッ」

「うん……」

保健室に戻ろうとした二人の前に八千穂が現れた。周囲に人がいないのを確認して、彩は八千穂の手を掴む。

「キャッ！」

「明日香姉ちゃん、僕たちだよ～」

八千穂はドキドキしている胸を押さえ、「はァ～、ビックリした～……」と溜息を吐いた。見えな
いものに突然手を掴まれたら、それは驚くことだろう。

「何してるの？ 何してるの？」

「あ、アンちゃん、ごめんね。もう、セミナー始まっちゃうから！」

「え……？」

彩は手を離した。八千穂は「じゃあね～」と二人に手を振り、とっとと先程の教室に入っていく。

呆然と八千穂の背中を見送った彩は溜息を吐き、アンリはベソをかき始めた。

「……明日香姉ちゃん……僕たち、嫌いになっちゃった……？ ……う、ふエ……」

彩は本格的に泣き出しそうになったアンリの手を引く。

「泣くのダメ。……ルイせんせ～のここ戻ってから」

「う、うん……」

時折しゃくりあげるアンリの手を引いて、彩は保健室に戻ってきた。

そおっと保健室の戸を開ける。幸い、誰もいない。いるのは瑞麗だけらしかった。

「……？」

瑞麗は振り向くと、光学迷彩を切ったアンリがメソメソと泣いているのを見つけて首を傾げる。

「どうした？ 階段からでも落ちたのか？」

「ち、ちが……違うの……明日香、姉ちゃん……僕のこと、嫌いにな、ちゃ……ッ」

言葉になったのはそこまでで、そこから先は泣き声だった。

「……一体何があったんだ？」

瑞麗は彩を見る。彩は言った。

「人が、いっぱい教室。明日香お姉ちゃん、そこに行った。彩たちと、話す時間ない、言われた」

「……？ どの教室だ？」

彩はたどたどしいが、瑞麗にわかってもらえるように一生懸命説明する。瑞麗は「ああ……」と頷いて彩の頭を撫でた。

「そういうことか。……アンリ、泣くな。八千穂は決して君を嫌っているわけではないから」

「ほ、ホント……？」

「ああ。本当だ。私は嘘は言わない」

「うん……うん……よかった……」

涙を拭うアンリに、彩はリュックから箱ティッシュを出して手渡す。

「最近、準備がいいな」

瑞麗は苦笑した。

「電算室……？」

風邪のひき始めらしい葉佩は、鼻が詰まっているのか口が半開きである。

「鼻声だな」

「ちょっと、風邪気味らしくて……」

「葉佩が風邪をひくと、子供らが心配だ」

「あ～……酷いな～……ルイちゃん……」

苦味のない液体栄養剤を分けてもらいながら、アンリと彩が疑問に思っていたことの原因を、瑞麗から話して聞かされている。

「そこに明日香ちゃんが入りしてるんだ？」

「ああ。この學園で流行るものだから、いわく付きには違いない。頭の片隅に留めておいてほしいんだが、生徒の話で最近よく聞くのは、《隣人倶楽部》というものの存在だ」

「……へエ……何だか、怪しげなデートクラ……ぶヘッ！」

鳩尾に瑞麗の拳がめり込む。

「そんなことあるわけないだろうが！ ……非公認倶楽部だが、《生徒会》がクレームをつけないよな倶楽部だ」

「ごほッ……な、なるほど……？」

「……注意するに越したことはないと思うが……子供らには近付かないようにっておいた方がいい。最近、あの辺りを散歩コースに入れているらしいから」

「……わかった」

「八千穂が出入りしているらしいから、彼女のこともそれとなく気にかけてやってくれ」

「了解です」

葉佩は頷いて、風邪薬と栄養剤をまとめて口の中に入れ、飲み下す。

「……体によくないぞ。お前が苦いものが大丈夫なら漢方薬を処方するんだが。よく効くぞ」

「ありがとね。でも、苦いもの嫌いなんだもの。仕方ないよ」

「我慢しろ。子供じゃないんだ」

「世の中には我慢出来るものと出来ないものがあるんだよねエ〜」

「まったく、屁理屈ばかり捏ねる……」

瑞麗のぼやきと重なるように、ガラッと保健室の戸が開いた。

「あ〜……眠い……」

「あ、甲太郎ちゃん」

「は〜ば〜きィ〜ッ！」

皆守の目が葉佩を見た瞬間に吊り上がり、拳を握り締め、重い一撃を葉佩の頭に炸裂させる。

「いだいッ！ な、何するの〜……?!」

「屋上に見えない何かがいるんだよ……！ ギャーギャー大騒ぎして、人の安眠妨害しやがったんだッ！」

皆守は言いたいことだけ言うと、とっととベッドに潜り込んだ。

「……ここは静かだ……」

「うちのコ、うるさくないよ？」

瑞麗はコン、と煙管を灰皿の端で叩き、灰を落とす。

「感じ方は人それぞれだ」

葉佩は肩を竦め、一つ溜息を吐いた。

「へッ……ペシッ！ ……あ〜……」

「……変なくしゃみ……」

皆守は隣の席に座る葉佩を見て半ば呆れたような声を出した。

「風邪かよ」

「そうみたい……」

完全な鼻声だった。すべてに濁音がついているように聞こえる。

「九ちゃん、顔色悪くないー？」

「あ〜……平気平気……俺が倒れたら、家のこと出来る人いないから、頑張んなきゃねエ……」

「アンリと彩は？」

「保健室にいるよ～」

「……お前、今日は早めに帰って家で寝てろよ。ガキどもに風邪うつされでもして、またピーピーお前に泣きつかれるのは嫌なんだよ」

「う～……そ、そうした方がいいのかなァ……」

「亮太クンに来てもらえばいいのに。アンチャンと彩チャンの面倒見てくれるよ？」

「……う～……」

葉佩は机に突っ伏して、ズズッと鼻水を吸る。

「亮太には頼らないの～……決めてるの～……」

「駄々っ子みたいなこと言ってんじゃねェよ」

ガンッと皆守に椅子の足を蹴られた。グラリと椅子が揺れる。

「亮太に言え。言わないと、後で三倍になって嫌味が返ってくるぞ」

「うわ、皆守クン、言い辛いことをアッサリと……」

顔を上げた葉佩が涙目なのは、出てきた熱のせいなのか、皆守の忠告（嫌味）が響いたのか。

「……帰る……」

「何、泣いてんだ？」

「泣いてないよ。可愛い人のところに寄って、帰るって言うてる。……保健室に寄って、二人を連れて……家に帰らなきゃ……」

立ち上がってバッグを持つ。一歩二歩。足が進まない。

「……お前、フラフラしてるぞ？」

「亮太クンに車回してもらったら？」

「『どうして俺様が仕事だというのに、ボンクラのために、わざわざ、車を回さねばならんのだ。わざわざ、わざわざ』……こうだね。聞こえるようだね。……ん、大丈夫。まだ頭回ってる。じゃ、明日ねェ」

「……おう」

「あったかくして寝るんだよ～？」

「は～い……」

ガゴッ！

教室の戸を開けかけで出ようとすれば頭もぶつける。

「……いだい……」

しゃがみ込む葉佩を見て、皆守は「仕方ねェなァ」と腰を上げた。

「俺も帰る。……こいつ、家まで送ってくるわ」

「あ、それがいいかもね～……って皆守クン?! 授業はどしたの?!」

「知らん」

「コラーッ！」

「知らん知らん」

「ル、ルイちゃん……いますか～……ゴホゴホ……」

咳まで出てきた。

ヨレヨレしている葉佩の腕を掴んでいる皆守はざっと保健室の中を見回した。

「おい、カウンセラー！」

「大きな声を出さずとも聞こえている。……どうした？ 葉佩は本格的に風邪か？ この季節は寒暖の差があるからな……」

「アンリと彩は？」

「昼寝中だ」

「暢気なもんだな。起こすぞ」

「……葉佩を送っていくのか？」

「この調子でガキ二人連れてくのは難しいだろ」

「……まァな」

瑞麗は仕切られ、見えない位置にいるアンリと彩の許に向かう。二人とも猫スーツを着てスヤスヤ眠っていた。

「アンリ、彩。起きろ」

「ん～……」

「う～……」

もぞもぞ動きながら唸っている二人に瑞麗は言う。

「お前たちの父親が倒れそうだ。今日は帰って寝るそうだから、続きは家で寝ろ」

パチッと目が開いて、二人ともが起き上がった。

「……パパ、風邪……？」

「……父、体悪い……」

「ああ、現在進行形で悪い。……帰る支度をしなさい」

「は～い」

「……彩、帰る」

子供たちがゴソゴソと支度をしている横で、葉佩は壁に寄りかかってふにゃふにゃしている。

「……葉佩、熱を測ってみたらどうだ？」

瑞麗は葉佩に体温計を渡す。

「……ん～」

渡された体温計で測ってみると――

「……八度五分……」

「平熱は？」

「六度五分」

「……家に帰ったら、おとなしく寝ろ」

「はい……」

医者に言われてしまえば顔くしかない。

一方、八千穂。

『どうして俺様が仕事だというのに、ボンクラのために、わざわざ、車を回さねばならんのだ。わざわざ、わざわざ』

「だって、本当に調子悪そうなんだもん」

『……うむ……ボンクラはともかくとして、アンリと彩が心配だ。わかった。少し抜けてそちらに向かう』

「うん」

『着いたら、皆守甲太郎に連絡を入れればいいのだな？』

「うん」

八千穂は亮太に電話していた。携帯電話の番号を交換しておいてよかったと思う。まさか役に立つとは思わなかった。

「え、と～……皆守クンに連絡しなきゃ」

そして、皆守の携帯電話が鳴った。

「亮太が？ ……ああ、わかった」

葉佩は額に貼れる熱冷まし用のシートとマスクを分けてもらいながら皆守を見た。

「……どうしたの～？」

「ああ」

電話を切って、皆守は言う。

「八千穂が亮太に車を出せと言った。……亮太が来るとさ。わざわざ」

「うわ……そうなんだ……」

「俺の携帯に電話を入れるらしい。……まさか番号を交換していて正解だったと思うことがあるとはな……」

「……うう、ホントにね……」

口をへの字に曲げて葉佩は俯く。瑞麗はポカッと煙を吐き出して言った。

「亮太とかいうのは、子供たちの叔父か。二人から聞いたことがある。本人同士に確執があろうがなかるうが、その厚意に甘えるべきだろう。……葉佩、何があっても子供らには絶対にうつすなよ」

「……はい……」

亮太はぶつくさ言いながら運転している。

「これで俺様に風邪がうつたらどうしてくれる?!」

「……だ、だから、マスクもらってきたじゃない……げほごほ」

「亮太、いいから前見て運転しろよ」

「こ、こんなことならば、同僚の車を借りてくれればよかった……！」

亮太の車は国産の軽であるため、車内は少々人で過密状態である。そして、走らない。

「車、車ッ！」

「……アンリ、押さない……」

「暴れるな！」

「……ごほッ、ゴホゴホッ」

「……車が、重い……」

マンションの駐車場で四人を降ろし、亮太は「後でガソリン代を請求してやるから覚えておけ」と言い残して去っていった。

「……気持ち悪い……」

青い顔をして、彩は肉球付きの手で口元を押さえている。

「彩、大丈夫か？」

「アンリ、押すから……」

大暴れしていたアンリは知らん顔で、父の手を握って「パパ平気？」と心配そうに眉を寄せている。

「親父よりも彩の方が心配だな」

「彩、平気……」

「無理すんな」

皆守は彩を背負い、葉佩はアンリに手を引かれてマンションに入った。

「……も、もう、寝たい……」

寮で一応着替えては来ている。天香の制服でうろうろは出来ないからだ。とはいっても、学ランの下に着ていたワイシャツの上に、上着を羽織っただけ。下はジーンズ。

風邪をひいているときには、少々寒い格好である。

「寒い……眠い……」

エレベータの中、葉佩は壁に寄りかかってぐったりしている。

「もう少し辛抱しろよ。彩だって頑張ってるんだぞ」

「彩、もう平気。治った」

ずるずると皆守の背から下りると、彩は「父は？」と葉佩の手を引く。

「父は……へ、平気ー」

「じゃない。まったく平気じゃない」

無理矢理笑っている葉佩の言葉を遮る皆守は彩に言った。

「うちに帰ったら、寝かせてやれよ」

「は～い」

「うん」

そこそこ聞き分けのよい子供らのおかげで、葉佩は家に帰った途端、パジャマに着替えてベッドに潜り込み、轟沈することが出来た。

葉佩が一瞬で寝付いたのを確認した皆守は、「そういえば、昼を食べていない」と思い出した。亮太が抜け出してきたのは、ちょうど昼休み時間だったのだろうか。

「お前ら、昼は？」

「お昼はお弁当あるから、それ食べるね～」

「彩も」

皆守は「はァ」と溜息を吐き、

「……俺は葉佩の分でも食うか」

と保健室から持ってきた昼の弁当を開ける。

平日の真昼間。昼のバラエティーを見ながら弁当を食べているという非現実感。

「……パパ、大丈夫かなァ……」

コアラの形に抜かれたニンジンのグラッセを食べながら、アンリは「みゅ～……」と眉間に皺を寄せる。

「心配」

彩もインゲンを食べながら目を伏せた。

「……お前ら、あいつがぶっ倒れたとこ見たことないのか？」

弁当用の小さいハンバーグをフォークで突きながら皆守は訊く。アンリと彩は揃って頷いた。

「ないよ」

「父、いつも元気」

「……まァ、バカは風邪ひかないからな。……八千穂がいい見本だ」

八千穂が聞いたら、間違いなく激昂してスマッシュを打ち込んでくるであろうことをシレッと言いつつ、皆守は続ける。

「でも、ま……ただの風邪だろ。ツタンカーメンみたいなことにはならんだろうさ」

「？」

「？」

「勉強しろ。すぐにわかる」

皆守は子供らの頭を一回ずつ撫で、苦笑した。

――俺、何言ってんだ……

敵の子供に。

葉佩家――夕方。

「甲太郎兄ちゃん、明日学校あるのに、いいの？」

「そんなもん、適当でいいんだよ」

世話焼き魔人としては、風邪っぴきの父親一人と子供二人を放置して部屋を後にすることなど出来ようか。

「……さて、葉佩は何を食うんだ？」

苦いものは食べられない。

薬すらロクに飲めないのだから始末に終えない。

甘いものは嫌い。

辛いものと酸っぱいものは食べる。

「……白粥。決まり。これでいい」

ミルクパンに米と水を入れ、火にかける。

「アンリと彩は何食わせるか」

ピンポン.....ピンポン.....

インタフォンが鳴った。

「は〜い！」

アンリが答える。

「あ、リョタ兄ちゃん！」

「.....まア、来るだろうな.....」

ここまでは想定の範囲内である。

彩がぺたぺたとスリッパを鳴らしながらキッチンに入ってきた。

「.....彩、オムライス.....」

「オムライスか。わかった。カレーピラフでー」

「ケチャップ」

「カレーピラフでいいだろ」

「ケチャップご飯.....」

譲れない一線らしい。

そうこうしているうちに、亮太が来た。

「プリンを買って来たぞ」

「なめらかプリ〜ン！」

向こうでアンリの声がした。有名店のなめらかプリンを手土産にしたらしい。

キッチンにズカズカ入ってきた亮太は、冷蔵庫にプリンをしまうと、彩を見た。

「何が食べたい？」

「オムライス」

「うむ」

「卵トロトロ、ケチャップご飯.....」

「了解した」

皆守の冷たい視線。

いきなり入ってきてそれか！　と言いたい。

しかし、着替えてきたところを見ると、仕事は早上がりしたのだろうか。

「皆守甲太郎、貴様、ここで何をしている？」

「飯の仕度だ」

「そうか。手伝え」

「わかった」

亮太の手際がいいのはよく知っているから、大人しく従う。葉佩が相手ならばイニシアチブを取って進められるのだが、亮太が相手では、手伝いに回った方が仕事の回りがいいのだ。

上着を脱ぎ、手を洗って場所を空けた皆守の代わりに包丁を持つ。

「.....包丁をそろそろ研ぎ直した方がよさそうだ。日曜にでも研ぎ屋に持っていこう」

タマネギを刻みながら呟く亮太。亮太の手元を覗き込んでいた彩は、

「一緒に行く」

と言う。

「うむ」

「ゲーム買って」

「うむ」

——言いなりかよ！

と、ツッコミたいのをグッと我慢して卵を割る皆守。

「一人でつままない～！」

アンリまでキッチンに雪崩れ込んで来た。狭くはないシステムキッチンであるから、小さい子供が一人増えても問題ないのだが、騒がしさは十人前だ。

「アンリ、静かにしろ。親父が起きるぞ」

「あう……」

皆守に諭され、ようやくアンリは黙る。

「……さて、アンリ、オムライスだが構わないな？」

「うんッ。オムライス大好き！」

「ボンクラは——」

「白粥」

「問題ない」

男所帯であるが、食卓は賑やかならしい。

「そういえば……」

フライパンに油を引きつつ、皆守は亮太に聞いた。

「お前、一人暮らしなのか？」

「うむ」

「親は？」

「かなり前から別に住んでいる。天香在学中の頃からロクに顔を合わせていない」

「そうか」

「そのおかげか、料理は上手くなったが」

——まァ、凝り性っぽいからな……

と口には出さないが、心の中で呟く皆守。

「目が痛い～」

「……涙出た……」

アンリと彩はタマネギに負けてキッチンを出て行った。

「姉さんも、ほとんど親とは会ってしまい。孫にも
会わせていないだろう」

「……そうなのか」

「うむ」

「何で？」

「住んでいる場所が、少々遠い」

「……なるほどな」

どこだ、とは訊けなかった。

訊くな、と亮太の横顔に書かれている。

――機会があったら、葉佩に訊くか。

と思い、亮太が刻んだ材料をフライパンで炒め始める。

「皆守甲太郎」

「ん？」

「アンリと彩は可愛いかな？」

「ああ、随分懐かれたな」

「可愛がってやってくれ。俺様も日本に帰ってきてから仕事ばかりで遊んでやれない」

「日曜ごとに会いに来てるだろうが」

「足りない」

「そうか」

――叔父馬鹿め……

それも、さすがに口には出せなかった。

夕食時になって、葉佩が部屋から出てきた。

「あ……亮太……」

「ボンクラ、来てやったぞ」

「頼んでないし……ゴホ……ッ」

真っ赤な顔をして、目は腫れぼったく、頭はボサボサ。着替えたのか、手に浴衣を持っている。

「パパ～……平気……？」

「父……心配……」

「ああ、平気平気。寝れば直るよ」

空元気で笑ってみせると、葉佩はバスルームの洗濯機に浴衣を放り込んで帰ってきた。

「おい、何か食うなら、白粥作っといたぞ」

自分だけカレーピラフにしたオムライスを突きつつ皆守は言う。

「あ、ありがとね、甲太郎ちゃん……」

そこまで言って、葉佩は目をまん丸にした。

「……こんな時間にここにいていいの？ 明日、学校だよ？」

「ああ、気にすんな。いいんだよ」

どうでもよさそうに言い放ち、「あ～、やっぱカレーは美味いなァ」と満足そうに呟く。

皆守の皿に、ニュッと横合いから手が伸びた。

「あ、コラ、彩！」

「美味しそう……」

「ああ、好きなだけ食えよ。お前の親父の飯、あつためてくるから」

亮太は口の周りをケチャップだらけにしたアンリの口の周りを拭いながら、葉佩に言った。

「座れ」

「……はい」

アンリの隣に座り、額に張っていた熱冷ましの冷却シートを剥がし、部屋から持ってきたと思しき新しいシートをペタリと額に貼る。

「……ああ、冷たくて気持ちいい……」

「馬鹿は風邪をひかんのにな」

「酷い……」

「熱は測ったのか？」

「八度二分……」

「そうか」

「……亮太、ありがとねエ」

「俺様は当然のことをしているだけだ。アンリと彩を心配するのは当然のことだ」

「……だね」

淡々とした会話。

ハラハラと見守る子供二人の前に、葉佩の白粥が出てきた。

「スプーン、茶碗、レンゲ、これでいいか？」

「塩ください」

「……ほらよ」

物珍しそうに子供二人は白粥を見つめ、問答無用でスプーンを粥の鍋に突っ込むと口に運ぶ。

「……あちちッ」

アンリは慌ててスプーンを口から出し、

「味しない……」

彩は眉をしかめた。

「そりゃそうだ」

そう言った皆守の後に、亮太は子供二人に教える。

「米を水で炊いただけだ。普通の白飯をたくさんのお水で炊いただけ。米の味しかない」

「……あ、そうなんだア……」

「……米……」

どこかがっかりしように子供らはオムライスのお続きに取り掛かる。葉佩はケチャップと卵が浮いてしまった白粥をレンゲでよそい、塩をパラパラ振り掛けると口に運ぶ。

「……お粥なんて、久しぶりに食べたア……」

もそもそと白粥を口に運びながら、葉佩は皆守に訊く。

「あのさ」

「うん？」

「お前さん、明日、学校はどうするの？」

「気が向いたら行くさ」

「……あ、そう」

「あア」

基本スタンスは変わらない。

寮にいるか、葉佩の家にいるか、その差だった。

「……ん？」

皆守の携帯が鳴っている。

「あ、ちょっと悪い、出る」

「うむ」

サブディスプレイに出ているのは、『八千穂明日香』の名前。嫌な顔をして電話に出る

「俺だ」

『まだそっちにいるの？』

「悪いか。どっかのバカの熱が下がらない。アンリと彩の面倒は誰が見るんだよ」

『そうだけど～……いいなア～』

「本音はそれか」

『うるさ～い！ ……明日、ちゃんと学校来るんだよ』

「はいはい」

プチッ。

皆守は電話を切ると、「気が向いたらな」と付け足した。

「甲太郎兄ちゃん」

「ん？」

「テレビ楽しい？」

「別に」

「DVD見ていい？」

時計を見ると、二十一時を回っている。

アンリは宵っ張りの朝寝坊。彩は早寝早起き。この時間が境目である。

「寝ろ」

「眠くないの～！」

「彩なんてもう欠伸してるだろ」

欠伸をする彩は半眼になっている。アンリが起きているので仕方なく付き合っているような素振りだ。彩も遅いときは遅いのだが、それでも早起きするところは性格なのだろう。

アンリはぷウッと頬を膨らませた。

「眠くない～！」

「寝ろ」

「うう～……」

「亮太も帰ったんだから、大人しく寝ろ」

亮太はアンリと彩が風呂に入っている隙に帰った。

「泊まってって～！」

としがみつかれたら負けるのがわかっているらしく、

「俺様は仕事があるため帰る。子供らによろしく伝えておいてくれ」

そう言い残して帰っていった。

アンリの手が皆守の寝巻き――葉佩の浴衣をガラッと着ている――の袖を引っ張った。

「じゃあ、甲太郎兄ちゃん、一緒に寝よ？」

小首を傾げてニコッと笑う。

「三人で寝るって言うのか!？」

「うん」

「……彩、眠い……寝る……」

妙なところで欲望に忠実な彩は、コテッと床に転がると一分もしないうちに寝息を立てていた。

「そんなところで寝るな、風邪ひくぞ」

「仕方ない」と溜息をついて、皆守は彩を抱きかかえて子供部屋に入り、ベッドに寝かすと、

「戸締りしてくるから、布団に入ってるよ」

と、アンリに言う。アンリは満面に笑みを浮かべ、コクコクと頷いた。

「……ったく……」

戸締りをキッチリし、子供部屋に入ると、アンリは彩をベッドの端に追いやって、ベッドの真ん中に陣取っている。

「彩と甲太郎兄ちゃんの間～」

やたらと嬉しそうだ。

「セミダブルのベッドでよかった……」

布団に潜った皆守をアンリはニコニコしながら見上げ、

「何か、お話して」

「はア……寝ろよ……」

「パパ、お話してくれるもん」

「……」

皆守は溜息を吐く。

「しょうがないなア……日本神話でも話してやるか」

「聞きたい聞きたい！」

「……じゃあ……スサノオとクシナダの話でもしてやろう」

「わ～い」

目をキラキラさせて話に聞き入るアンリだったが、十分しないうちに眠りに就いていた。

「……俺はどうするかな……」

起き上がると、一旦居間に戻り、アロマで一服する。

「……」

ゆるゆる立ち上る煙の先を目で追いつつ、

「……八俣大蛇か……」

と呟きながら、携帯電話の目覚ましをセットした。

「学校か……面倒臭いなア……」

テレビをつける。八千穂がはまっているというドラマを見ながら、「こんなときに限って眠気が来ない……」と内心愚痴っていた。

十月十三日。

「……あ～……辛い……寒い……」

前日の風邪を見事に引きずりつつ、葉佩は寮にいた。

「パパ～……」

「父……」

不安そうな子供たちは目に涙を浮かべ、マスクをして唸っている父の枕元でオロオロしている。

なぜそのように面倒な事態になったかというと――

『休みますのでよろしく』という伝言を、「面倒だから一緒に休む。行きたくない」と、文句を垂れていた皆守に伝えてもらおうと、何とか宥めすかして二時限が始まる少し前マンションから送り出し、担任の雛川女史に伝わったところまではよかった――のだが。

「まァ、葉佩君が？ 大変だわ。放課後に様子を見に行くわね」

という雛川女史のありがた迷惑な返答が帰ってきた。

「……學園に戻ります」

よろよろフラフラしている父を心配して、アンリは父のH. A. N. Tを起動させ――認証パスをどうしてアンリが知っていたのかは謎だが――亮太の携帯電話にメールを入れる。

『ぱぱががっこうにもどらなきゃならないみたい。ぼくたちも、いっしょにいくの。くるまでおくって……』

子供に頼まれたら嫌とは言えない亮太は、昼頃、ブツクサ文句を言いながら葉佩を天香近くまで送り、「後は知らん」と言い残して去っていった。

葉佩は何とか學園に戻り――いつものように、華麗に校内に戻るということが出来ず、アンリと彩をハラハラさせたのだが、それもまた仕方ないことだろう。

眠りに就いた父の額に手を当てたアンリは、「よ～し！」と頷くと、いつもの猫スーツを着込んだ。

「アンリ、どこに行く？」

尋ねた彩に、アンリは答える。

「ルイせんせ～のところ行ってくる」

寮を出た。ペタペタとかなりの距離を走り、校舎に入る。入ってすぐ右に曲がり、保健室の引き戸を開けた。

「……？」

気配に振り返った瑞麗は、迷彩をかけたままのアンリに向かって微笑んだ。

「どうした？ 今なら、誰もいないから入っておいで」

迷彩を切ったアンリは、パタパタと走って瑞麗に抱きつく。「よしよし」とアンリの頭を撫でると、瑞麗は姿を見ていない父親についてアンリに訊いた。

「……葉佩は？」

「パパ、寮で寝てるの。今日ね、学校終わった後、ヒナせんせ〜が来るってパパ言ってた。戻ってきたんだ」

「なるほど？ で、君たちも一緒に来たのか」

「うん」

「で、私のところに来たのは？」

「おでこにペタッて貼るのがほしいな〜」

「ああ、わかった」

瑞麗は頷き、アンリにシートの入った箱を持たせる。アンリがせっせとそれをコアラリュックにしまっているのを見つめていた瑞麗は「そうだ」と頷いた。

「……後で、私も葉佩の見舞いに行こう。苦くない薬を持ってな。あれは、百薬の長だろうから」

煙管を灰皿に伏せるように叩きいて灰を落とすと、アンリに向かってニッコリ微笑む。

「うんッ」

アンリは瑞麗に手を振ると、迷彩をオンにして再び校舎を後にする。目的のものをゲットして足取りは軽い。

「……？」

五時限目が始まっている時間だった。

グラウンドではどこかのクラスが体育の授業をしている。が、その脇で見学をしているらしき生徒が数人いた。青白い顔をして、皆一様に頬がこけ、病的だ。

「……」

足を止め、見つめる。

「ご飯食べてないのかなァ……」

きっとそうだ。そう思い、父の許に戻ることを優先した。

「ただいま〜」

戻ってきたアンリは、音を消してゲームをしていた彩を見る。

「新しいのもらってきた。でねでね、後でルイせんせ〜来てくれるって」

「……うん」

彩は頷き、父の枕元に移動した。

「……えい」

ペリッと冷却シートを剥がしたとき、遠慮なく寮のドアが開かれる。一瞬ビクッと体を震わせてドアの方を見やった子供たちだが、顔を覗かせたのが皆守とわかり、ほっと胸を撫で下ろした。

「よう」

「甲太郎兄ちゃん！」

アンリと彩に続けざまに体当たりのような抱きつきを食らい、さすがの皆守も一歩後ろに下がる。

「親父は？」

「寝てる」

「手に持っているのは？」

「冷たいの」

「ああ、早く貼り付けてやれ」

サボタージュをかました皆守は、アンリと彩を連れて自分の部屋に籠っていた。ゲーム機をしっかりと持ち込まれている。

雛川に会うのは、避けたい。

雛川は瑞麗とともにやってきたようだ。廊下を通る声でわかる。

「部屋の鍵は開いているらしい」

瑞麗は言う。先程、皆守から瑞麗には連絡を入れておいて正解だった。

「あら、瑞麗先生、誰から……？」

「皆守甲太郎からだ」

「まァ……！ 友達を心配するのは素晴らしいけれど、自分もちゃんと授業に出なければ……」

「フフ……後で、本人に伝えておくよ」

聞こえるように言ってやがるな……と心の中でぼやくが、表立って文句を言うわけにいかず、黙って部屋の中でアンリと彩の相手をする。

「甲太郎兄ちゃん」

「あ？」

「パパ、死んじゃわないよね？」

「風邪じゃ死なない。大丈夫だ」

「……パパ、いなくなったら……」

「だから、大丈夫だ」

チョコレートを食べながらグジュッと涙ぐむアンリの頭を乱暴に撫でる。隣室のドアが開き、目を覚ましていたらしい葉佩と瑞麗、雛川が交わす言葉が漏れ聞こえてきた。

「……」

雛川は似ている気がした。

それが誰か、わからないが。

――皆守くん……

胸が痛い。

「……あ、出来ない……」

彩の声で我に返る。

「前、出来たのに……」

塊を転がしているらしい。

無邪気な子供二人を見ているうちに、自分の感傷を少しは忘れられるような気がして皆守は苦笑

する。

アロマをふかしながらゲーム画面を眺めていると、 雛川だけ先に帰し、残った瑞麗が皆守の部屋のドアを叩いた。

「いるのだろう。わかっている」

皆守はドアを開けた。

「ああ、何だよ、カウンセラー」

「葉佩の熱は大分下がったようだな。寝たら直ると本人は言っていたが、まさしくその通りだ」

「そうか」

「今日は一日、このまま寝かせておけ。上手くすれば明日には動けるだろう。無理は禁物だが」

「.....俺に言われてもな」

「まァ、確かにそうだ」

苦笑した瑞麗は、皆守の後ろにくっついてきたアンリと彩の頭を撫でると、「ではな」と手を振って去った。

「大丈夫だとよ」

「うんッ」

「.....よかった.....」

ほっとしたのか、彩のお腹がぐ〜.....と鳴った。

「お夕飯.....」

「わかったわかった。親父のところに戻ってろ。何か作ってやる」

世話を焼かずにはいられない親子に、「はァ〜.....」と大きなため息を吐いて、「カレーでも作るか」と、それしか選択肢がないくせに、そう呟いて炊事場へと向かう皆守だった。

十月十四日。

「へ……ぷしッ」

三時限目終了後に登校してきた葉佩は、まださすがに鼻声であったが、熱は治まったようだった。それでもマスク着用なのは、子供に風邪をうつさないための仕様なのだろう。

転寝しながら一時間やり過ごし……

――昼。

「おい、葉佩」

「あ～……何、甲太郎ちゃん」

鼻声というよりも、ダミ声である。

マスク越しで少しは変わるとはいえ、この変化はとてつもない。普段の葉佩の声を聞き慣れていたせいか、非常に違和感がある。

「すごい声だな……。ま、まア、いい。昼はどうするんだ？」

「マミーズ行こっかねエ」

「？ アンリと彩は？」

「今日は亮太が休みなんだって。二人連れて、遊園地行ったよ。朝、その支度してたら遅刻しちゃったア……」

「なるほどな」

アロマに火を点ける皆守。甘いラベンダーの香りが辺りに漂う。

「たまには子供のいない生活もいいんじゃないか？」

「ん～……亮太が一緒だから心配はないと思うんだけどねエ」

まずはそこか、と皆守は呆れたような溜息を吐き、

「よし、行こうぜ」

と、立ち上がったそのとき、

「九ちゃん！」

どこか腫れぼったい顔をした葉佩の首に抱きつく八千穂。葉佩から「きゅう」と変な音がした。首が絞まったらしい。

「八千穂、絞まってるぞ」

言いながら、自分の首を指差した皆守に、八千穂は慌てて葉佩から腕を放した。

「……コホン」

解放された首を撫でながら、葉佩は八千穂を見る。

「どうしたの？ お昼、一緒にマミーズ行くかい？」

「ううんッ。あたしは行くところあるからねッ」

ニッコリ笑う八千穂だが、今一つ顔色が冴えない。だが、そんなことを感じさせない口調で、彼女はこう続けた。

「九ちゃん、今、悩んでることとかない？ 何でも相談に乗るよッ？」

「と、唐突だねエ」

席から立ち上がった葉佩は、「ん～……」と首を傾げた。

「そうだねエ……特にはないかなア？ その気持ちだけ、ありがたく受け取っとくよ」

そして、微笑む。八千穂は「そっかア」と頷くと、こう続けた。

「あたしね、最近は少しでも多くの人に親切にしようって決めてるんだ～。そうすることで、自分も幸せになれるんだって。……ん～と、確か……『ナンジのニンジン』……？ とか。そんなふうに教えてくれた子がいるんだよ。その子の話聞くだけでも幸せになれるっていうか……」

「そうかい」

「うんッ。……あ、急がないとお昼のセミナー始まっちゃう！ じゃね～ッ！」

教室を出ようとした八千穂の体がグラリと傾いだ。

「おっと……！」

すばやく抱き止める葉佩の耳に、周囲の女子生徒の声が入ってくる。

「……最近、明日香付き合い悪いよね～……」

「噂の倶楽部に通ってるって……」

葉佩の片眉が動いたが、それ以上のアクションはなかった。

「大丈夫かい？」

尋ねる葉佩。皆守も机に頬杖をついた格好で訊いた。

「八千穂、お前顔色悪いぞ」

「ええ～ッ、そんなことないないッ！ でも、皆守クンが心配してくれた～。ちょっと嬉しいな～」

「何を馬鹿なこと言ってんだ？」

「えへへッ。ありがと。じゃあねッ。後でね～ッ」

腕を組んでどこか仏頂面をしている葉佩は、「ふ～む？」と唸って首を傾げる。

「『汝の隣人を愛せよ』か。……アンリは『レンジのニンジンアイスよ』って言ってたねエ。聞き間違えて」

どういう聞き間違いだ！ とツッコミたいのをグッところえ、

「蒸かしたニンジンアイスの話の話は後で聞いてやる。飯に行こうぜ」

「はいはい」

葉佩は苦笑して皆守の後について教室を出た。

「いらっしゃいませエ～。マミーズへようこそッ！ 何名様——」

「二人」

皆守の視線が舞草に突き刺さる。彼女の口がアヒルのように突き出された。

「う、微妙に先手を……」

「毎回同じこと訊いてくるから、とっとと話を進めてやったんだろうが」

「うう～、でも、マニュアルに書いてあって……」

「知るか」

ますます進行するアヒル口。

「マニュアルって、仕事の上での聖書、聖典ですよ！」

ついでに頬まで膨らませている。

「ね、ね、葉佩くん、そう思いますよね?!」

皆守に一人で立ち向かうのは分が悪いと思ったのか、舞草は葉佩に同意を求める。

「うん」

非常に簡潔な同意であったが、彼女にはそれで充分だったらしい。

「ですよねッ！　　ですよねッ！」

「……ったく。わかったよ。だったら、客を待たせてないで、さっさと案内したらどうだよ」

「はッ！　あたしとしたことが！」

ようやく職務を思い出したのか、舞草は葉佩と皆守を席に案内しながらこんな話をした。

「そういえば、お二人は、『隣人倶楽部』って知ってます？　デジタル部のタイゾーちゃんが主催してる倶楽部なんですけど～——」

「マミーズのカレーは美味いんだがなァ、俺ならもっとフェヌグリークを利かせて……」

葉佩が聞いていようがいまいが、皆守は一人でカレーの講釈を垂れている。いつものことなので、右から左に聞き流しておくことにした。

「……ん～」

葉佩はそれほど食欲もないのだが、「後でお腹が空きそうだなァ」と一人頷いて、

「校舎に戻ったら、売店寄るよ～」

と皆守に言う。

「さっき食っただろ？　もう、ボケる年なのか……？　こうはなりたくねエな……」

憐れむような目で皆守は葉佩を見る。

「うう、ボケてないよ。食べたのはちゃんとわかってます。……後でお腹空くかもしれないでしょ」

「……まァな」

下足箱で靴を脱ぎ、上履きに履き替えていた葉佩と皆守の背後から、

「……やァ……」

と、低い声がかかる。葉佩は振り向くと、「ああ、こんにちは」と微笑んだ。取手鎌治がいた。

「九龍君、風邪は平気かい？」

「あ、うん。何とかねエ」

「アンリ君と彩君は？」

「今日は出かけてるんだァ」

「そうかい。さっき保健室に行ったら、『いない』とルイ先生が言っていたから」

「うん」

頷く葉佩の隣で、皆守はアロマに火を点けて取手を見た。

「お前、これから飯か？」

「うん。違うよ。ご飯はもう食べた。……実は、葉佩君の耳に入れておきたいことがあってね…

…『隣人倶楽部』って知ってるかい？」

「……今日はよくその名前を聞く日だなァ……」

ぷかぷかとアロマから煙をたなびかせながら皆守は呟く。

「どう？ 聞いたこと、ある？」

「あるねエ。……明日香ちゃんもハマってるらしいんだァ。心配してるんだよ」

「それなら、話しておくことがある」

そう呟いた取手に、皆守は言った。

「まさか、お前も舞草みたいに『参加したいから一緒に来てくれ』とか言うんじゃないだろうな」

「まさか。……以前の僕ならありえたかもしれないけれど、もう、そんなことは言わないよ」

苦笑した取手は、葉佩を見る。

「あの倶楽部の主催者と活動内容なんだけれど――」

取手の話が一段落した後、「この人混みの中、売店で何か買おうとは思えない」とぼやく皆守を先に教室に帰し、するりするりと人混みを縫って菓子パンと調理パンを手にする葉佩。

「……あんぱん……焼きそばパン……あんぱんと……焼きそばパン」

あんぱんは食べない。――甘いから。

焼きそばパンなら食べる。――甘くないから。

迷わず手を取る焼きそばパン。そして、それは情け容赦もなく最後の一個。

「あ〜、焼きそばパン売り切れた〜！」

という誰かの叫び声に「ごめんねエ」と心の中で両手を合わせ、葉佩はレジに並んだ。

――これで、お腹が空いても大丈夫。

うんうんと頷きながら、金を払って売店を出た。そこに、

「ああ……お昼の売店は混んでるでしゅ……焼きそばパン、食べられないでしゅ……」

何とも言えない甲高い声が耳についた。そちらを見ると……

「……真ん丸だねエ……」

柄の伸びきったTシャツを着た、恐らく縦横斜め、どの方向から見ても丸に見えるような男子生徒が、切なそうな顔をして売店を覗き込んでいる。

「……」

葉佩は自分が手にしている焼きそばパンを見る。

「う〜ん……お腹が空いたらマミーズに行けばいいかァ」

金がないわけではない。

「『汝自らを愛するが如く、汝の隣人を愛せよ』……だねエ」

葉佩は真ん丸の男子生徒の肩を叩く。

「こんにちは」

「？ 何でしゅか？」

「んふふ。焼きそばパン買ったかったの？」

ふわ〜んとした葉佩の笑顔に釣られたのか、男子生徒はコクコクと頷いた。

「焼きそばパン、大好きでしゅから」

「そう。……これあげるね」

男子生徒の手を取って、掌の上に焼きそばパンを載せた。

「よかったらどうぞ」

「えッ？ い、いいんでしゅか?!」

「うん。どうぞ。遠慮なく。んふふふゴホゴホ」

いつもの笑いを浮かべつつ、軽く咳き込む。

「だ、大丈夫でしゅか？」

「あ、うん。平気平気」

「キミの名前を教えてほしいでしゅ」

「名前なんていいじゃない。お前さんは焼きそばパンを食べたかった。俺がお前さんに焼きそばパンをあげたいと思った。……その意思の疎通がここにあれば、名前なんていらないでしょ？ どうぞ」

葉佩から見れば、どの生徒も自分の子供か弟のように見えているのかもしれない。

ニコニコ微笑んでいる葉佩に、男子生徒は「映画のヒーローみたいでしゅ」と微笑み返し、こう切り出す。

「そうだ！ ここで会ったのも何かの縁でしゅ。キミは今悩みがないでしゅか？」

葉佩は笑顔のまま僅かに首を傾げ、聞こえないほど小さな声で、「なるほど？」と呟いた。

体育館一一六時限目。

『おゆうはんまでにかえるね』

H. A. N. Tのメッセージに微笑んだ葉佩は、自分の隣で体育館の隅の壁に背を預け、大欠伸をしている皆守に言う。

「見て見てッ。アンリからメールが来たよ〜」

「アドレスは、亮太の携帯か」

「さすがにまだH. A. N. Tは持たせてないからね」

ニコッと微笑む葉佩は、自分に向かって飛んできたバスケットボールの方を見もせず、格好良く片手で受け止めようとしたが見事に当たった。この辺り期待を裏切らない。

「葉佩、大丈夫か?!」

心配するクラスメートに引きつり笑いを浮かべながらこう返した。

「ん、んふ、んふふふ……危ないねエ。んふふッ。大丈夫だよ〜……」

「ならよかった。葉佩、皆守、そろそろ交代の時間だからな〜」

「了解～。……いたた……」

ボールをコートに戻して、メールの返事を打つ。

『りょうのほうに かえってきてね。ごはんを よういして まってます。かえってきたら きょうのおはなしを きかせてね』

アンリと彩に読めるように、ひらがなで書く。

「寮に？」

「うん」

ピピ〜ッとホイッスルが鳴った。

「おやおや、俺たちの出番らしいねエ」

「違うチームだがな」

「負けないよ？」

「病み上がりのボケ老人に負けられるか」

「……ムカツ」

「口で言うな」

スパーンと皆守のツッコミが葉佩の頭に炸裂し、やたらと運動神経のいい二人が別チームで戦うことになった。

結果だけ報告しておこう。

皆守のチームが勝った。葉佩の敗因は、隣のコートから転がってきたボールに躓いて転び、彼の手からボールがこぼれた。それを拾った皆守がお手本のような綺麗な3ポイントシュートを決めたことである。

探索以外はダメ人間という皆守による葉佩の人物評の正しさが証明されたようなものだった。

授業も終わり、「だるい、眠い」と言い始めた皆守とともに教室に戻ろうとした葉佩の耳に、甲高い女子生徒の悲鳴が聞こえてきた。

「……ん？」

マスクをしながら声のした方向を見る。

「グラウンド……うちのクラスの女子だな」

早速一服つけようとした皆守は、「何だか、嫌な予感がするぜ……」と言いつつ、カキンッと高い音を鳴らして愛用のジッポの蓋を開けた。そのとき、

「明日香ァーッ！ 明日香！ 大丈夫ッ?!」

葉佩は走り出した。

「葉佩ッ！」

「明日香ちゃんの様子、見に行かなきゃ！」

「……はいはい。見に行かなかつたら見に行かないで、あとで何か言われるのも目に見えてるからな……」

アロマに火を点けた皆守は、突っ走っていった葉佩がどこかで転ばないだろうかと見つめていたが、緊急事態のときはそういうことがないらしい。

「便利な体だ」

「ルイちゃ……ルイ先生、明日香ちゃんは？」

クラスメートがいる中で、さすがにルイちゃんとは呼べない。

「ああ、来たか。……何だかんだ言っているけど、心配かい？」

微笑む瑞麗に、皆守は小さく舌打ちをする。

「うるさいな」

「じゃあ、ルイ先生、私たちは教室に戻ります」

「ああ。雛川先生によろしく」

クラスメートが保健室を出て行ったのを確認したかのように、皆守は瑞麗を見た。

「……で、八千穂は？」

「元々、丈夫な子だ。衰弱してはいるが、安静にしていればすぐによくなる」

煙管を咥えていた瑞麗の目が葉佩を見た。

「……葉佩、心当たりはあるのだろう？」

「もちろん。……『隣人倶楽部』だねエ」

「そうだ。そして、ここにこうやって運ばれてきたのは彼女だけではない」

「やっぱりねエ」

瑞麗の説明を聞きつつ、葉佩は一つ一つ頷き、頭の中にすべての情報を詰め込んでいく。

「なるほどねエ。病原微生物(ウイルス)か。理解したよ」

「……ったく……葉佩の傍にいと、どうしてこう面倒事がやってくるのか……うんざりする。うんざりする」

「二度言わなくてもいいじゃない」

切れ長の瑞麗の目が更に細められる。微笑んでいた。

「おやおや、仲がいいな。……皆守も、こんな友人が出来てよかったじゃないか」

「か、カウンセラー……！」

「んふふッ。だって、甲太郎ちゃんは大事な友達だもの」

葉佩は笑い、寝かされている八千穂の方へ視線を向けた。

「もちろん、明日香ちゃんもね」

ここまで来ても、八千穂は《タイゾーちゃん》とやらの肩を持った。彼こそが救いを求めているのだと葉佩に言う。

「……わかったよ。心配はせずゆっくりお休み。大丈夫。俺が何とかしてあげるよ」

八千穂の頭を撫でてから保健室を出た葉佩に、皆守は小さな溜息を吐いた。

「お前が来てから、ここはお節介のたまり場になってる気がして仕方ない……」

「酷いねエ」

「全部、何もかも、お前が来てからだ！」

と葉佩の方を向いた皆守の視線が、葉佩を行き過ぎてその後ろを見つめる。

「？」

「白岐か……」

葉佩は振り向いてニッコリ微笑んだ。

「こんにちは、幽花ちゃん」

「こんにちは……」

白岐は僅かに視線を下げて目礼すると、静かに尋ねる。

「八千穂さんは？」

「ああ……生き死にに関わるほどのもんじゃない」

返答する皆守に白岐はほっと胸を撫で下ろした。

「そう、よかった……」

そして、顔を上げて二人を見る。

「《汝の隣人を愛せ》……八千穂さんが通っていたあの集まり……《隣人倶楽部》だったかしら。そこではそう説いている。体が衰弱していくことすらも、幸せに繋がる道だと彼らは信じている。衰弱していくこと——すべてを誰かのために差し出すことが幸せだと信じているのね。……けれど、本来の意味は違う。《汝の隣人を愛せ》……これだけが一人歩きして、本来の意味を失ってしまった……」

」

「そうだね」

葉佩は頷く。

「《汝、自らを愛するが如く、汝の隣人を愛せ》だからね。……明日香ちゃんのやっていることは、少々道を誤っていると言えるよねエ」

「ええ。……自分を愛せない者は、誰も幸せになど出来ないということ」

「……自分を省みない者に、他者を思いやることなど出来ない、ということか」

「ええ」

「……何でそんなことを俺たちに……いや、葉佩に、と言った方が正しいのか？」

皆守の言葉に、白岐は葉佩を見た。

「……私は葉佩さんに期待しているのかしら……。わからない……八千穂さんが倒れたと聞いてどうしてここまで自分が動揺しているのか……わからない……」

「あ、おい……ッ」

俯いた白岐はゆっくりと歩き去っていった。

二人はその後姿を見送り、揃って腕を組んで唸る。

「さて、とりあえず着替えに戻ろうぜ」

「そうだねエ……話は、それからだ」

「それから……ってことは……？」

「んふふ……」

「おいおい、《隣人倶楽部》に顔出す気かよ」

「もちろんだよ。……ちょっと、俺としても腹立たしいんだよね？」

「確かにな。……イライラするのは間違いない。……着替えたら、行ってみようぜ」

「んふふふッ。了解」

四階の電算室に着いた二人は、そのまま中に入った。セミナーとやらは今の時間行われていないらしい。

「ここで病原微生物をどうやって……」

「ようこそ《隣人倶楽部》へ～」

甲高い声。

葉佩は「んふふ、やっぱりねえ……」と小さく微笑み、皆守は声の主へと視線を向ける。

どの方向から見ても真ん丸であろうという男子生徒が立っていた。

「ここは神の牧場。誰もが救われる権利を持つ場所――あれ？ キミは確か……」

「こんにちは」

微笑む葉佩は丁寧に男子生徒に頭を下げる。男子生徒は葉佩に言った。

「お名前聞きそびれていたんでしゅ」

「んふふふッ」

「葉佩、お前こいつと知り合いか？」

小声で訊いてきた皆守に葉佩は頷く。

「そうだよ」

皆守は「ハア……」と大きな溜息を吐くと、「ほらな、やっぱりだ。やっぱりこいつの傍にはトラブルしかないんだよ……」とアロマに火を点けて、もう一度溜息を吐いた。

「キミは誰でしゅか～？」

ブツブツと文句を垂れている皆守に男子生徒は尋ねる。

「……俺は、皆守甲太郎。こっちは葉佩九龍だ」

「そうなんでしゅか～」

大きく頷いた男子生徒は「ん～」と首を傾げる。

「八千穂たん知らないでしゅか？ 放課後のセミナーに来なかったから、ボク心配してたんでしゅ」

「それじゃあ、お前が……」

皆守の眉間に皺が寄った。マスクで顔半分が隠れている葉佩の顔に貼り付いた微笑みは相変わらずだが。

「ボクは3年D組の肥後大蔵でしゅ。《隣人倶楽部》という集まりの主宰をしてるでしゅ」

「なるほどねえ？」

微笑む葉佩はコンコンと二度咳をして、肥後と皆守のやり取りに耳を澄ませた。

「リョタ兄ちゃん、今日は楽しかった！　ありがと〜！」

「.....ありがと.....」

「楽しかったな。また、行こう」

「うん！」

車の中で猫スーツを着込みながら、アンリと彩は笑っている。亮太も「これだけ楽しんでもらえれば、連れて行った甲斐があった」と内心頷きつつ、『到着した』と葉佩にメールを打っていた。

「二人とも、準備はいいか？」

「うんッ！」

「着た.....」

「では、気を付けて行くがいい。.....親父のH. A. N. Tからで構わん。何かあれば連絡を」

「うんッ！」

「.....バイバイ」

走り去る亮太の車を見送り、二人は猫スーツの光学迷彩をオンにした。そして、堂々と正門から中に入る。葉佩がいればワイヤーガンや彼の驚異的身体能力で壁など恐るるに足りないのだが、子供二人では到底無理だ。

この日は学園に来客があったのか、門はせいせいと開け放されていた。

ほてほてと二人で手を繋いで門をくぐり、中庭から男子寮に向かって歩いていく。放課後の学園は、日中よりもどこか開放的だ。皆、部活動にせいせいと声を出し、体を動かしているせいかもしれない。

葉佩がいなくて、キョロキョロと辺りを見回すと、父と皆守が揃って歩いているのが見えた。どこか深刻な顔をしている皆守と、顔半分がマスクに隠れた父が、小さい声で何かを話し合っている。

「パパ〜」

生徒の邪魔にならない場所に避けていたアンリと彩は父を呼ぶ。

「アンリの声だ」

「俺にも聞こえた」

「父.....こっち.....」

地面をよく見ると、手を振る猫型の長い影がある。

「.....目立つな.....」

「んふふ。俺もそう思ったよ〜.....今度から、寒いけれど日陰にいさせることにする」

「それがいいだろ」

葉佩は二人の方を見て手招きした。そして、

「おかえり」

と優しく微笑むと、二人を連れて寮へと帰る。

「で、葉佩、さっきの話の続きなんだが.....」

「うん」

「行くんだろ？」

「そうだねエ。『来るな』と言われれば行きたくなるでしょ？　んふふッ」

「……風邪っぴきがよく言うぜ……」

「んふふふふふ……」

部屋の鍵をポケットから出し、鍵を開けた。

「今日は少し早いねエ」

「飯はもう少し先でいいんだろ？」

「うん。じゃ、後でねエ」

部屋に入り、鍵を閉めると、光学迷彩を切ったアンリと彩を思い切りギュッと抱き締める。

「おかえり～！」

「ただいま～！」

「……ただいま……」

朝に比べると大分まともな声になっている父を見て、アンリはニッコリ笑う。

「楽しかったよ！　すごく楽しかった！　遊園地、初めてだったから、すごくすごく楽しかった！

」

「人、いっぱい、いない……乗り物乗った」

「そうかい。よかったねエ。亮太に後で、『ありがとう』ってメールを打とうね。そしたら、きっとまた連れて行ってくれるよ」

「うんッ。今度はね、水族館連れてってくれるって！　ペンギンとか、マグロとかいるって！」

「ペンギン見る……」

「パパも、今度は一緒に行きたいねエ……。明日香ちゃんとか、甲太郎ちゃんとか、みんなで行きたいね」

「うん！　次はパパも一緒！」

「一緒」

葉佩は言う。

「もうすぐ、二学期の中間試験もあるし……それが終わったら行こっか。日曜日だと混んでるだろうけれど……水族館なら……お弁当持って行こうね」

「わ～い！」

もう一度ギュッと二人を抱き締めたとき、トントン、とドアが叩かれた。

「おい、葉佩、開けろ」

「あ、はいはい」

鍵を開け、皆守を中に入れると再び鍵を閉める。

「随分早いねエ、甲太郎ちゃん」

「ああ、カレーの本を持ってきた」

「はい？」

「アンリ、彩、その中から好きなもの言え。作ってやる」

「ホント!？」

「……見る」

頬がくっつくほど二人で顔を近付け、並んで本を読んでいる。

それを微笑ましように眺める葉佩は「ふむ」と首を傾げた。

「今日の探索なんだけど」

「ああ」

「誰を連れて行こうかねエ。明日香ちゃんを連れて行くの怖いんだよ。体調が早々いい方に戻るものでもないでしょ？」

「まァな」

「.....困ったねエ」

「かといって、連れて行かなきゃ行かないで文句を言われる。.....どうしろってんだろうなァ、八千穂も」

「んふふ。そんなところが彼女の可愛いところだよ」

H. A. N. Tが鳴ったのはそのときである。

葉佩はH. A. N. Tを開き、「ふむふむ」とメーラーを開ける。

「おや、奈々子ちゃんと明日香ちゃんからだよ？」

小さく微笑み、葉佩は返信を打つ。

「明日香ちゃん、行きたいって。.....連れて行こう」

「いいのか？」

「うん。.....で、俺は、と」

「？」

「冷蔵庫の中にいいものがあつたはず.....」

冷凍庫の中からタッパーの中でコチコチに凍った何かを取り出した。

「.....な、何だそれ.....」

「んふふふふふ.....何でしょうねエ？」

凍った何かを持って、なぜか嬉しそうな葉佩は部屋を出て行った。

皆守は言葉もなくその後姿を見送り、子供二人の方に視線を移す。

「なァ」

「ん？」

「？」

「親父が持ってったアレは何だ？」

「冷凍庫の中の？」

「.....スープ」

「スープ？ 何の？」

「.....知らない」

「この間ね、楽しそうにお鍋でコトコト煮てたんだよ。その後で、隠し味とか言って、何か入れてもっともっと煮てた」

「.....」

葉佩の料理の味付けはいい。

ただ、何かわからないものを食わされる舞草が味付けで誤魔化されはしないかと不憫になった。

「.....一体.....あれは何なんだ.....」

「……スープ」

「スープだよ」

内容物の問題だ、と言いたかったが、自分がある限り料理に未知の食材が使われることはない。それだけは安心である。

カレーが出来上がり、アンリと彩が口の端から涎を垂らしそうになりかけた頃、葉佩はようやく戻ってきた。

「ビックリだね」

部屋に入ってくるなり葉佩は言う。

「奈々子ちゃんがプリクラくれたよ」

「プリクラ！ ええ〜ッ！」

「……アンリ、し〜……」

彩の手がアンリの口元に伸びる。

「……父、プリクラ……彩のは？」

「だって、まだ彩たちは奈々子ちゃんに会ってないでしょ？ ……ん〜……明日にでも紹介してあげるよ」

「そしたら、プリクラくれるかなア?!」

「きっとね」

葉佩は笑って、子供二人の頭を撫でる。

「お待たせしました。……甲太郎ちゃん、ご飯にしましょうか」

「……ったく……どこ行ってたのかと思えば……」

は、と気が付いて葉佩に聞いていた。

「お前がさっき持ってったコチコチのアレは……何だ？」

やはり、気になる。

葉佩は「んふふ」と笑うと、

「スープだよ」

とシレッと答える。

「何の？」

食い下がる皆守に葉佩は重ねる。

「ただのスープだよ」

怪しすぎる。

これ以上は訊かない方がいいだろうという結論に達した皆守は、甘めのエビのココナツカレーを葉佩の前に置く。

「飯」

「ありがとね〜」

ココナツの甘い香りがとても美味しそうだ。

「いただきま〜す！」

「.....いただきます.....」

手を合わせてアンリと彩は頭を下げると早速取り掛かる。

葉佩もスプーンを進めながら、皆守を見た。

「そうそう、甲太郎ちゃん」

「あ？」

「さっき、明日香ちゃんに会ってきたんだけど」

「あア」

「仲間外れにしちゃ嫌だって言われたよ。.....メールで連れてってほしいってさっき送られてきて、『一緒に行こうね』って送ったんだけど、やっぱり心配で.....。直接会って顔見たら、ますます連れて行ってあげなきゃならないって思った」

「.....そうか。少しは戻ってたのか？」

「うん。でも、完璧、ってことはないと思う。.....笑い方が寂しそうでねエ。連れて行ってあげない方が具合悪くするんじゃないかと思うほどだったよ。あんな顔されると思わなかった」

アンリと彩は顔を見合わせると、揃って父を見た。

「明日香姉ちゃん、どっか悪いの？」

「心配.....」

「ちょっと、いろいろあったんだよ。.....でも、今は大丈夫。あのコは元々丈夫だし、もう、元気だよ。アンリと彩がそんな顔をしてたら、逆に心配されちゃう。明日香ちゃんは元気だから、そんな顔をしたらいけないよ」

安心させるようにニッコリ笑い、カレーを食べ進める。

「それよりも、今日あったこと、いっぱいお話してあげる方が、明日香ちゃんは喜ぶと思うなア」

「わかった」

「.....お話、する.....」

「ん、それでいいでしょ。ね、甲太郎ちゃん」

「ああ、そうだな」

頷いた皆守は、傍らのティッシュを二枚取り出すとアンリの口の周りを拭う。

そこに、コンコン、とドアを叩く音が聞こえた。

「.....九龍君、いるかい.....？」

「鎌治兄ちゃんだ！」

アンリがニッコリ笑う。葉佩は頷いて腰を上げると、部屋のドアの鍵を開けて外に顔を出した。

「どしたの？ 鎌治ちゃん」

「ちょっと、いいかな.....？」

「ん、お入りよ。ご飯食べた？ 今ご飯の最中なんだ」

「あ、僕はまだ食べてない.....」

「じゃあ、一緒に食べよう」

「あ、ありがとう.....」

その会話を聞いていた皆守は、予備の皿にご飯を盛り、鍋からカレーをすくってかける。

「あ、皆守君、こんばんは」

「よォ。……まア、食べよ」

「ありがとう」

取手はダンボールを抱えていた。

それを自分の脇に置くと言う。

「田舎からリンゴを送ってきたから、食べるかなと思って。おすそ分け」

「ありがとねエ。遠慮なくいただくよ〜。アンリも彩もリンゴは好きだよ〜？」

「大好き！」

「……リンゴ……食べる……」

「よかった」

微笑む取手は葉佩に尋ねる。

「これから、潜るのかい？」

「そだよ〜」

問いに答えたのは、口の端から海老の尻尾をはみ出させたアンリ。

「甲太郎兄ちゃんと明日香姉ちゃんも〜」

「そうなのかい？」

「ああ。……八千穂はどうかと思ったが、連れて行かないと後が怖そうだからな」

皆守はコーヒーを飲みながら口の端を持ち上げた。

葉佩と彩はのんびりと食事している。テレビがついているのがいけないのかもしれないと皆守は思うが、ここで消してもまたうるさいだろう。

タレントが一万円で一ヶ月生活するという企画をやっているが、アンリはそれを見ながら、

「僕も『獲ったど〜』ってやってみたいなア……」

子供の戯言だと聞き流せないのが恐ろしい、なぜなら、

「あ、加賀智とかいたら、やってみようかなア……！」

幼いといっても、その辺りは《宝探し屋》の息子である。

二十分ほどして、全員の食事がようやく終わった。

「美味しかったよ。皆守君、ご馳走様」

「当然だ。俺のカレーだぞ」

自慢げに言う皆守に、取手は「そうだね」と微笑む。まったくカレーにかけては皆守甲太郎の右に出るものはない。

「さて、支度しようかな」

葉佩はクロゼットを開けると、ベッドの上にアサルトベストやハンドグレネードなどをポイポイと投げていく。その手がピタッと止まった。

「あ、そうだ。あとでリカちゃんに連絡しなきゃ」

「何だよ、椎名に連絡？」

「あれ？ 今日八千穂さんを連れて行くんでしょ？」

怪訝そうな皆守と取手の声。子供らはテレビに釘付けである。

「鎌治ちゃん、リンゴいっぱい持ってきてくれたじゃない。俺ねエ、お菓子は全然作れないから、リカちゃんからレシピを分けてもらおうと思って……」

「なるほどね。……九龍君、すごいね。何でも挑戦するんだね」

感心している取手に、皆守は「はア……」と溜息を吐いた。

「こいつの手際の悪さは筋金入りなんだがな……」

ぷか〜ッとアロマの煙が立ち上る。

「自分が菓子類を食わないから、まったく作れないってのも困ったもんだな」

「カレーしか作れない甲太郎ちゃんに言われたくないよ！」

「作れないんじゃない。作らないだけだ！」

どっちもどっちである。

「ま、まアマア……」

取手は葉佩と皆守に苦笑を向けつつ、言った。

「じゃあ、僕はそろそろ失礼するよ。支度しなきゃならないんじゃ、お邪魔になるからね」

「あ、待って、鎌治ちゃん」

葉佩は取手の腕を掴んだ。

「ショパンの練習曲の楽譜、あったら貸して。コピーして返すから」

「了解だよ。……ベートーヴェン以外も弾くんだね」

「ん。まアね〜」

葉佩は快諾してくれた取手に笑顔で返し、部屋を出て行く背中に手を振る。

「よし、と。今日はこんなもんで足りるかねエ」

葉佩は「うん」と一つ頷くと微笑んだ。

もそもそ、もそもそ……

お菓子しか詰まっていない——いや、最近は箱ティッシュが目撃されている——ぬいぐるみリュックの中身。ぬいぐるみが微妙に歪んでいるのは内容物の形にもよるのだろうが……

もそもそ、もそもそ……

目の前を手を繋いで歩いている猫スーツのアンリと彩。それに合わせて、ぬいぐるみまで、もそもそ、もそもそ、と、しかも後ろ向きに歩いている感じがする。

「……」

アロマを口の端で燻らせつつ、探索の度に毎度眺める光景は、確かに見慣れた感があるけれども、奇妙と言ったら奇妙なのだ。

「あ、ちょうちょ！ まだむ！ まだむ！」

アンリは「う〜……ん」と手を伸ばすが、マダムはアンリの手が微妙に届かない位置をふわりふわりと飛んでいる。

「こんばんは。マダム」

仰々しいがそれでいて恐ろしく丁寧で美しい挨拶。演劇部所属の葉佩は芝居がかった調子でマダム

に深く頭を下げる。

「.....嫌味なほど似合うんだよな.....」

「九チャンだもの」

「.....わからん」

だが、『九チャンだもの』で納得しかけた自分があるのもまた否めない。

「まだむ、こんばんは！」

「.....こんばんは」

「こんばんは.....探求者たち.....また会ったわね.....」

闇の中に静かに響くマダムの声。葉佩はマダムと何やらアレコレと話をして、トレードがどうの、その食材はまだだよ、とか何とか笑ったり呆れたりしながら話をしている。

「.....また会いましょう」

「よし。いいものいただきました！ 魂の井戸が楽しみ〜ッ」

くるりと振り返った葉佩は、八千穂と皆守に言う。

「さ、進みましょう！」

無意識のうちに周辺索敵をする癖がついている彩は、「いない.....」と一つ呟いて、手短にあった宝物壺を揺すっている。開かないらしい。葉佩は傍にあった梯子を素早く下り、下の方を探りに行った。

「壊しちゃえばいいんだよ」

アンリは簡単に言うが、この宝物壺というものは何だかんだと壊れない。縦の衝撃にも、横の衝撃にも強く、蹴ろうが叩こうが壊れなかった。

「とうッ！」

「えい」

父が帰ってくるまでの間、アンリと彩は宝物壺をサンドバッグ代わりにして遊んでいる。

「なァ、八千穂」

「なァに、皆守クン」

「あの宝物壺の中身が、もし、もしだぞ？ 爆薬か何かであった場合、ガキどもの遊びの衝撃で爆発でもしたらどうなるんだろうな」

「.....案外、宝物壺が爆風を防いでくれたりしてね。音だけして何ともないとか.....」

戻ってきた葉佩は、すいすいと宝物壺を開け.....中に入っていたのは。

「轟炎爆薬だ.....」

「わァ.....」

八千穂は胸元にギュッとラケットを抱き締める。

「え、何、二人ともどうしたの？」

事情を知らない暢気な父さんは、揃って溜息を吐いている皆守と八千穂を交互に見て首を傾げた。

「葉佩.....お前のこと、殴っていいか。いいよな。いいと言え！」

「な、なな、なん何で？」

「ま、まあまあ、皆守クン。.....ほら、九チャン、碑文があるよ！ 先に進もうッ！」

碑文を読み、先に進む。

「あ、何かあるよ」

アンリは床を指差す。

「それを踏むと、仕掛けが作動、だな」

皆守はアロマに火を点ける。

「簡単なことじゃないか。踏まなきゃいい」

「だねッ」

八千穂は大きく頷く。葉佩はアンリを抱え、皆守は彩を抱え、八千穂はラケットやら救急箱を抱えてそれを飛び越えていく。

「またあった」

ひょいッと飛び越える。皆守、八千穂も葉佩の後に続く。

「おやおや、まただねエ」

ひょいッと葉佩がジャンプしたそのとき、

「パパ！ さっきよりもここー！」

アンリの悲鳴。

「葉佩、足元！ 間隔が広い！」

「おやア？」

カチッ。

「またア……ッ！」

八千穂の呆れたような声。

「父……ドジ……」

彩は肉球付きの手で顔を覆った。

ゴウン……

嫌な音がした。ゴロゴロゴロゴロ……という、遠雷のような音。が、それは、あからさまなスピードでもって背後から葉佩たちに向かってきている。

「これって……映画とかでよくあるよねエ……。岩が転がってくるの。まさかのリアル・ジョーンズ博士～！」

八千穂の引きつり笑い。皆守は八千穂の腕を掴む。

「んなこと言ってる暇はないッ！ 向こうに逃げろ！」

「おやおや、大変だ～」

言葉とは裏腹に、葉佩はアンリを抱え直すと、音に背を向けて猛烈なスピードで走り出す。

「穴があるぞ……ッ！」

「穴ッ?!」

「飛ぶよ～！」

アンリを肩に担いだような格好で、葉佩は地面の端を蹴った。続いて、皆守、八千穂が宙を舞う。

風圧すらある岩の接近。地に足をつけた八千穂の背後で、ゴォン！ と派手な音とともに岩が穴の中に落ちていった。

「……か、間一髪……」

額の汗を拭う八千穂に、葉佩は、

「ごめんごめん。んふふふふ」

と申し訳なさそうに微笑んだが、その頭に皆守のチョップが飛び、

「パパ〜!？」

という、お約束のアンリの絶叫が続いた。

八塩折の醸造所。

葉佩はあちこち見て回りながら、後ろからちょこちょこついてくるアンリと彩に話す。

「八俣大蛇っていう大蛇がいてね、それを退治するとき、スサノオはお酒を使ったんだよ」

「何で？」

「酔わせて、寝込んだところをやっつけたんだよ。そうでもしなきゃ勝てないほどの大蛇だったんだ」

」

「この間、甲太郎兄ちゃんからそのお話聞いた！」

「そうなの？」

葉佩の目が皆守を見る。

「ああ。……まア、その話の途中で爆睡されたがな」

「えへへ」

その話を聞いていた八千穂は、彩の手を引きながら笑っている。

「九チャンをやっつけるときにも、お酒が必要かなア」

「父……お酒大好き……」

「ちょ……ッ！ 俺は、そんなにお酒に目が眩むような……！」

「……この間、瑞麗から日本酒もらってたろう……」

皆守のボソツとした呟き。

「……！」

「え、いつもらったの?!」

聞き返した八千穂に皆守は答える。

「風邪ひいて寝込んでたときに、『見舞いだ』と言って持ってきたらしい……」

ニヤリと笑った皆守を見て、葉佩は視線を逸らした。

「はて、何のことやら……？」

「パパ、喜んでたよね」

「父、嬉しそう……」

子供からもそう言われ、グウの音も出ない。

「むウ～……」

一つ唸った葉佩は、下へ下へと降りていく。

甕が八つ並んだ部屋があった。

「……」

石碑に書かれていることに頷くと、甕の前へと立つ。

「あのねエ、俺だって自分の限界を知ってますよ？ 確かに酒は好きだけど、ベロンベロンに酔うほど飲まないし」

「子供の前で酒を飲む父親はロクでもないらしいぜ？」

ぷか〜ッとアロマの煙をたなびかせる皆守は、何やら妖しい気配の漂う甕を横目に見る。

「あ、『教育上よくない』って、何かの本で読んだ気がするよ？」

と八千穂。

「で、でも……お酒……」

「子供が寝てから飲めばいいだろ。な、アンリ、彩。言ってやれ」

突然話を振られたアンリと彩は、顔を見合わせて首を傾げた。

「僕たち、あんまり気になんないよ？」

「父、お酒飲む……普通」

ゴソゴソと甕を回して部屋の中を移動する葉佩の背中を見ていた皆守が一言。

「そうか。普通じゃ仕方ないな……」

その声音には諦めと呆れが混じっている。

ガコン、と音がした。

「あ、パパ〜！ お社が開いてるよ〜！」

「はいはい。みんなこっちにおいで。たぶん、出るからね」

葉佩が《秘宝》を取り上げると同時に、彩が言う。

「敵、八」

「うん。やっぱりね。……片付けてきます」

ニコッと笑った葉佩は、社のある小部屋を出ると両手のハンドガンを連射し始めた。

「んふふッ」

その口元から笑みが消えることはない。

「……ある意味、不気味だな」

ハンドガンの銃声の紛れる皆守の声は、誰にも聞き取られることはなかった。

醸造所の石碑を読んでいた葉佩の眉間に皺が寄った。

「……これ……かなり危ないんじゃないかねエ……」

八塩折を抱える八千穂、彩の手を引く皆守、アンリの手を引く葉佩。隊列はこれで問題ない。

「とりあえず、行ってみようか……」

とてつもなく嫌な予感がする。

重い扉を開けた途端……

「……！」

目の前を火の玉が横切る。

「ちょ……ッ！ これ……！」

悲鳴に似た八千穂の声。皆守の舌打ちが続いた。

「当たれば黒焦げだな……」

間欠的に噴き出す炎。入ってすぐの窪みに五人で立ち止まり、今後の作戦を立てる。

「……俺、思うんだけどね」

葉佩は土のつもる足元に、指先で何かを描いていく。

「たぶん、ここの罫の作りっていうのはこうなってるんだよ」

八分割された表のようなものが出来た。表上部に一から八と数字が振られている。

「石碑に書いてあったのは……」

一と八の下に長い矢印。そして、二・四・六、三・五・七の下には、奇数偶数と矢印は交互に並んでいる。

「こういうことだね。一つ目と八つ目は常に火を噴いて、あとは交互に火を噴くってこと。……入ってきてから火の玉は今まで五つ。複数の音がかぶさってるけど、ここの火の玉が奇数個のときは、二・四・六が火を噴いて、偶数個のときは三・五・七が噴いてるのは確実だね」

言った傍から、六つ目の火の玉が横を通り過ぎる。

「では、どうしようか。甲太郎ちゃんは彩を抱えて行ってくれる？」

「ああ」

「俺はアンリを抱えてくね。明日香ちゃんは、八塩折をよろしく」

「うんッ！」

「彩、しっかり甲太郎ちゃんに抱きついててね」

「うん……」

「アンリ、おいで」

「パパ～……怖いよオ……」

通路いっぱいには飛び交う火の玉にベソをかいているアンリを抱き上げると、葉佩はギュッと抱き締めて言う。

「彩、アンリ。大丈夫。甲太郎ちゃんと明日香ちゃんとパパを信じてね」

「うん……」

「七つ目の火の玉が出たら、走るよ。たぶん、渦巻き状になってるんだと思うから、角を一つずつ丁寧に回ろうね」

熱風と轟音とともに七つ目の火の玉が通り過ぎていく。

「行くよ！」

魂の井戸――

「走ったねエ……」

「ふみこんだ途端に火の噴き出すペースが速くなるってどういうことだ!？」

「お、俺に言われても困るよ、甲太郎ちゃん……」

何とか自分自身が炭素化せずに済み、アンリと彩もようやく人心地といったところなのか、リュックの中からペットボトルのお茶を出して飲んでいる。

「こ、怖か、た……」

ベソベソと泣きながらでもしっかりと甘い紅茶を飲んでいるアンリに皆守は言う。

「彩なんて悲鳴一つ上げなかったぞ」

「……当たらない」

「ま、そういうことだよな。当たらないのはわかってるわけだ。ピーピー泣く必要はないって事だ」

「アンチャン、頑張ったね～」

八千穂はアンリの頭を撫でつつ、葉佩を見上げた。

「九チャン」

「何だい？」

「途中で壊れる壁があったよ？」

「うん。H. A. N. Tがそんなこと言ってたねエ。休憩終わったら、爆破しに行ってみようかな」

「彩も……」

「彩は爆弾大好きだねエ」

「……うん」

猫の尻尾がふりふり動いている。

「……爆弾好きだねエ……ってなア……」

「彩チャン、見かけによらず派手好きっぽいのかなア」

「そういう問題じゃない！」

ゴッ、と八千穂の髪分け目に皆守のチョップが入る。

「い、痛い～！」

「ツッコミだ。……悪く思うなよ」

「ひどい～！ も～ッ！」

「悪意がない分、厄介だよねエ……」

葉佩はボソッと呟き、コンコンと咳をする。そして、肥後へと通じる扉に手をかける。重い音が響き、ゆっくりと扉が開く。

化人創成の間にて、葉佩は肥後大蔵と対峙した。肥後は葉佩や皆守に隠れるようにいる猫スーツの二人に目をやる。

「誰でしゅか？」

「俺の息子」

「葉佩くんの息子しゃんでしゅか？ キミは一体……？」

「んふふふ……」

葉佩は微笑む。

「ただの通りすがりの《宝探し屋》です」

肥後は「うう……」と小さく呻く。葉佩の口調も語調も、昼に焼きそばパンを肥後に差し出したときと変わることはない。

優しく微笑みを浮かべ、そこに立っている。そのいでたちは常人のそれではないのだが。

肥後の視線がアンリと彩に映った。肥後と目が合っても恐れることはなくじっと見つめている。

「彩」

「何……アンリ」

「遊園地にいたパンダさんに似てるよね」

「……おっきなミニトマトが似てる……」

肥後に聞こえないところで二人はそんなことを話していた。それを聞いていた皆守は小さく肩を震わせる。

「ミ、ミニトマト……」

肥後の髪がトマトのヘタだとしたら、体は確かにトマトのようだ。それも真ん丸。ミニトマト……

「いや、大きいという時点でミニトマトじゃない」

そんなふうに思い直した皆守の隣で、八千穂は複雑な顔をしている。信奉していた《タイゾーちゃん》が《執行委員》であることは、葉佩から聞かされて知っていた。

知ってはいたが、こうして前にするとやはり、悲しかった。

八千穂の想いを知ってか知らずか、葉佩と肥後の会話は続いている。

「息子しゃん、可愛いでしゅねエ」

「そうでしょ?! だって俺の息子だもん! こんなに可愛いコは世の中にそうそういないよ!」

目をキラキラさせて葉佩は言う。肥後は悲しそうな顔をした。

「……葉佩くんはいい人でしゅ。……なのに、悪い魂の言いなりになってここに来ちゃったんでしゅ……。息子しゃんまで巻き込んで……」

「それは違う」

葉佩は首を横に振る。

「お前さんが心配だから、みんなで外に出るために迎えに来たんだよ」

そして、微笑んだ。肥後は再び「うう……」と唸る。

「ボクは……ボクは……葉佩くんが悪い魂を持っていると思えないでしゅ……わ、解らないでしゅ……」

「タイゾーちゃん……」

頭を抱える肥後に駆け寄ろうとした八千穂を止めたのは、八千穂を遮るように真横に伸ばされた葉佩の左腕だった。

「九ちゃん……」

葉佩は黙って首を横に振ると、右手をホルスターへと伸ばす。

「そ、それでもボクは……この場所を知ってしまった人を見過ごすことは出来ないでしゅ!」

肥後の目が赤く光った。

「みんなの幸せのためにも、《生徒会執行委員》として、キミたちをここから排除するでしゅ!」

葉佩はその場から飛び退り、皆守はアンリと彩を小脇に抱えると同じように飛び退る。八千穂は動

けなかった。

「タイゾーちゃん！ タイゾーちゃんの幸せは……!?!」

「葉佩ッ、スーツの対ショック性能を試していいかッ?!」

「え、エエッ?! ちょ……！ な、何を……！ ああああああッ?!」

「むぎゅッ」

「ぷぎゅッ」

皆守はアンリと彩を床に放り出し、肥後の攻撃の的にでもなるつもりらしい八千穂の手を掴んだ。

「八千穂ッ！」

「ッ！」

八千穂のいた位置を、それこそすべてを押しつぶす勢いで肥後が転がっていく。

「そのまま伏せてて！」

肥後の起き上がりに合わせて葉佩の銃が火を噴いた。

床に伏せたまま皆守と八千穂は斜線上から這って離脱すると、アンリと彩の許へと走る。

「おい、二人とも大丈夫か？」

「……甲太郎兄ちゃん……ヒドイ……ビククリした……」

膨れるアンリは怪我一つない。ただ、猫スーツは泥だらけになっていた。

「肥後大蔵でしゅ」

「よろしくねエ」

「よろしくねッ！」

「……ね」

「『汝、己を愛するが如く、汝の隣人を愛せ』……ね」

ぽか～……とアロマの煙が立ち上っていく。

「一番大切だけれど、一番難しいことでもあると思うんだよ」

「まァな」

ベッドを占拠して爆睡態勢に入っている子供二人の寝息が響く部屋。皆守は、武器の手入れをしている葉佩の部屋でコーヒーを飲みながら、ぬぼ～ッと眠そうな顔をして座っていた。

「ま、今日もお疲れ様でした。助かりました。うんうん」

泥だらけの猫スーツはゴミ袋の中に入っている。埃が飛び散らないようにしてあるらしい。

「甲太郎ちゃんがいると、本当に助かるねエ……。今週はいろいろとお世話になっちゃったもの。んふふふ」

微笑む葉佩の口元は、マスクで覆われていた。少々無茶をしたらしく、熱がぶり返しかけている。

それでも、仕事の後はやるべきことをしなければならぬし、子供にベッドを明け渡すのも当然のこ

とらしい。

「お前、今日はどこで寝るんだよ？」

「ベッド」

「スペースがないぞ」

「反対側に丸まって寝るから。……大丈夫大丈夫。狭いところでも眠れます。床で寝るよりも、ぶり返す確率は低いと思うよ」

「まァな。……ったく……お前の面倒まで見なきゃいけない俺の身にもなれ」

「んふふふッ。甲太郎ちゃん、本当に世話焼きさんだからねエ。……性分なんだろうねエ」

「まァ、そうだな」

「甲太郎ちゃんはさ——」

葉佩は組み上げた銃から顔を上げた。

「後は自分のことを好きになれば、きっと、もっと、周りに優しくなれると思うんだ」

「俺は優しくなんてないが」

「んふふふ。……自分でそう思ってるだけだよ。お前さんは俺なんかより、よっぽど周りが見えている。……素晴らしいことだと思うよ」

「……」

「『汝、己を愛するが如く、汝の隣人を愛せ』……だよ」

「うるさい。年寄りの説教は長いしウザい」

葉佩は笑って銃をテーブルの上に置くと、自販機で買って来たと思いきオレンジジュースを手にする。

「……ん～……もうすぐ中間試験だねエ……」

皆守の眉間に皺が寄った。

「嫌なことを思い出させるな」

「そろそろ、本気出したら？」

「何のことだ？」

「俺の成績より、ずっといい点数取れるでしょう？」

「知るか」

「んふふふ。『能ある鷹は爪を隠す』……そんなふうに見えてますよ」

「……」

「《ロゼッタ》の内勤とかどう？ 就職ならいくらでも斡旋してあげるよ～。甲太郎ちゃん、どこの部署でもやっていけそうだし」

「《ロゼッタ》は不景気知らずか」

「まァね～」

葉佩はニコニコしている。

「んふふふ。考えておいて。……亮太も、結構甲太郎ちゃんのこと買ってるみたいだし」

「亮太が？」

「んふふふ」

そのまま話し込んで、結局寝たのは午前四時。

翌日、珍しく寝坊した彩に叩き起こされたが、二時間遅刻した。

二巻目のあとがき！

こんにちは。紫 桐子です。

お手に取っていただき、ありがとうございます。

無事に2冊目です。

もっと短いスパンで出せるように頑張りたいところですが、なかなかうまくいきませんね。

次から頑張ります。

さて、パパと子供たちの冒険も次のステップに進み始めました。タイゾーちゃんと茂美ちゃんの2人は印象深いですね。いろいろと。

茂美ちゃんの話は宇宙人話から始まって、よくわからない宇宙刑事が出てきたり、お風呂覗いちゃったり、境のじいちゃんに同類呼ばわりされたりして、本当に印象深い。

タイゾーちゃんは、みんなのためを思うやっちーが間違えた暴走をしたりして、彼女の健気さに目頭が熱くなったりしました。

でも、小さい子に「汝の隣人を愛せよ」と言ったって、本当に伝わらないと思います。聞き間違えて「レンジのニンジンアイスよ」とアンリが言いますが、意味が分からない言葉は本当に意味が分からないものです。わかる言葉に置き換える、いわゆる空耳は子供の方が多いいんじゃないかと思いました。

3冊目は個人的に好きな話が入ってきます。砲介ちゃんのくだりです。

皆さんに楽しんでいただけるように、頑張って早めにお届けできるようにします！

では、またお会い出来る日を楽しみに……

《秘宝》のご加護があらんことを！

2012年8月

紫 桐子

天香學園狂騒曲～《宝探し屋》子育て奮闘記・に！

<http://p.booklog.jp/book/50951>

著者：紫 桐子

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/underwaterlotus/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/50951>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/50951>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

九龍妖魔學園紀 ©2004,2006 ATLUS/SHOUT! DESIGNWORKS